

アジアと女性解放

Asian Women's Liberation

アジアの女たちの会

連絡先：
東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号 400円



写真：吉村 繁

特集

「開発と女性」

逐次刊行物

昭 63. 2. 23 和

国立婦人教育会館

婦人教育情報センター

- 女性の立場から見た「開発」とは何か
- 現場から——
タイ、バングラデシュ、マレーシア、韓国、フィリピン
- 日本の援助の問題点
- 開発教育とは何か
- 内的発展の担い手としてのおんな



No.18

1986.12

女性差別・民族抑圧からの解放をめざして!

特集・「開発と女性」

「私たち途上国の女性が直面している最大の問題は、まず栄養失調の問題、つまり生存権そのものが脅かされていることです。だから何よりも食べもの、水、燃料、住まいを確保できること、それが開発の最重要課題です」

あるインド女性を書いた「女性の開発への参加」という論文の書き出しです。それは、第三世界の女性たちが人間らしく生きるための開発を求める叫びです。

「女性と開発」——途上国でも、先進国でも、この言葉は、さまざまな活動をしている女性たちの間のキーワードになっています。国連婦人の10年の3つの目標は「平等・開発・平和」であり、どれも切り離すことができないものととらえられました。しかし、私たち日本の女性にとって「開発」という言葉は、工場を作ったり、道路を開いたりといったイメージしかなく、開発とは何かを問うこともなしに開発途上国の女性たちの問題だと片づけてきました。

これまで、アジアをはじめ第三世界の国々で進められてきた開発は、民衆に「パンと自由」を与えるものではなく、途上国内部で貧富の差を拡大し、国際的には南北の格差を拡大したのです。それは、先進国の多国籍企業を誘致する「輸出加工区」による工業化、先進国に安い食糧を供給するためのプランテーション化や農業近代化——まさに先進国本位の開発であったからです。そのような開発を強行するために、多くの途上国で、軍事独裁政権が民衆を抑えつけています。こうして民衆は、外国による経済支配と自国の権力層による政治的抑圧に苦しんでいます。女性にはさらに女性であるがゆえに、より一層開発の犠牲にされ、三重の抑圧を受けているのです。

窮乏化する農村から都市にまず押し出されるのは若い女性たちです。外国企業の工場に安い労働力として使われ、歓楽街で性を売られ、街頭を物乞いにさ迷い、不法占拠者（スクワッター）としてスラムに沈殿しています。そして家庭では夫の暴力にさらされ、生まれた子どもを栄養失調で失い、あまりにも苦痛に満ちた女の一生——それが何億人の女性たちの現実なのです。

そのような開発に「経済大国」日本も深く関わっています。工場進出や農業開発、貿易・金融など企業活動を通じて、また、政府の開発援助（ODA）を通じてです。加速化する資本の国際化で、日本の国内産業が空洞化し始め、日本の女性たちも失業やパート化などの事態に直面しています。それは途上国の女性の低賃金労働と表裏一体になっています。日本の経済体制そのもの、私たちの生き方そのものが問われているのです。

「女性も参加すべきだとされる開発のあり方が問題なのです。私たちは、どのような社会を目ざし、そのためにどのような私たち自身の開発戦略を持つのか、共に考えましょう」——アジア女性研究行動ネットワーク（AWRAN）のスリランカ女性は呼びかけています。

私たち「アジアの女たちの会」では、昨年秋から1年間、「開発と女性」をテーマに「女大学」を開いてきました。今回の『アジアと女性解放』はそのときのおはなしをまとめたものです。私たちに何ができるかを模索する第一歩としたいと思います。

1986年12月

ア ジ ア の 女 た ち の 会

女大学

女性の立場から見た「開発」とは何か

松井やより

◆先進国本位の開発

沖縄の石垣島の白保はサンゴ礁の美しい海岸だが、ここにジャンボジェット機の入る新空港を建設しようとしている。本土からの観光客をもっと誘致し、農産物を本土へもつと空輸するためだという。けれども住民に何の相談もなく沖縄でただ一カ所残っているサンゴ礁をこわし、魚を殺して空港を作っても、本当に島の人々のプラスになるのか、結局は本土資本の利益になり、本土への従属を深めるだけではないかと、白保で反対運動が起こっている。

この白保へ行ってみて、東南アジアなど第三世界で進められている「開発」のヒナ型そのものかと思った。白保では、とくに女たちが反対運動の先頭に立っているが、「開発とは何か」を女性の立場で考えてみたい。国連婦人の十年の三つの目標は平等、開発（発展）、平和であった。日本の女性の関心事は主に男女の平等と平和の問題だったが、第三世界の女性たちは開発が最大の問題であ

った。七五年のメキシコ宣言は「男の不平等は低開発の問題と密接不可分」と述べていたが、第三世界の女性たちは開発を抜きにして平等や平和を語れないのである。スリランカの「女性の声」の活動家で「アジア女性研究行動ネットワーク」（AWRAN）のヘマ・グナティラセさんは「第三世界の女性の地位は国連婦人の十年の間にも改善されなかった。これは開発のあり方が先進国の利益のためだったから」と言っている。また一九八四年のベナン消費者協会主催の「第三世界・開発か危機か」国際会議でも、「開発の名の下に土地も森も海も地下資源も人材もすべて豊かな国に奪い取られ、人々は追い立てられ窮乏化し流民化している」という結論だった。売春、スラム、海外出稼ぎ、女子労働者の搾取などアジアの女性を苦しめる深刻な社会問題は今までの開発のあり方、つまり都市のエリート中心の開発による農村の貧困が根本原因になっている。そして農業近代化も進められているが、そこにも問題がある。

◆農業近代化と女性

第一に自分たちが食べるための作物より先進国に輸出するための換金作物を作るようにさせられた。これは植民地時代より継いだものがさらに拡大した。フィリピンでのバナナ、さとうきびのプランテーション、アフリカのコーヒーやトウモロコシなどだ。女性たちが低賃金で働いている問題だけでなく、それまで彼女たちが生産していた食糧の代りに、先進国の人々が食べるビフテキになる牛のエサのためのトウモロコシを作らされて、自分たちは食べるものに事欠く。換金作物は世界市場により価格が左右され、最近では値段が下がって、途上国の生産者は打撃を受けている。フィリピンのネグロス島の飢えも砂糖の価格が下がったためだ。マレーシアはイギリス植民地時代からプランテーションの国だったが、ゴムは二年間に四一％も下落し、パームオイルも値下がりした。パームヤシのプランテーションでは、女性と子どもがこぼれ落ちた実を拾う労働

をしてしているが、目をおおうばかりの貧しさだ。インスタントラーメンやマーガリンに使うパームオイルの生産をになう彼女たちは、一次産品価格下落という大きな世界経済の仕組みの中で、貧困から抜け出すあてもない状況だ。

第二に、米作地帯でも、先進国本位の変化が起こっている。「緑の革命」により女性が仕事を奪われたりしている。「緑の革命」とは機械、農業、化学肥料などを使用して収量の多い品種の米を作る農法で、増産を目的とする。しかしインドネシアでは女性が伝統的な鎌でやっていた穂摘みが機械にとってかわられた。機械が入ると男性が操作することになる。マレーシアでは除草は女の仕事だったが、農業が使われるようになってやはり仕事はなくなった。

第三に、農業近代化にともなう土地改革さえ、女性に不利になる。土地所有者をはっきりさせると男性が地主になることが多いからだ。共同体所有の土地を男女が共に耕していたのに、女性は土地なし農民になってしまふ。

◆貧富の差の拡大

第四に、貧富の格差がますます拡大する結果になっている。たとえばバングラデッシュで日本製のポンプ



やっと飲料水が手に入るようになって水汲み労働から解放されたスラムの女性たち(バングラデシュ)

には貧富の格差が開いた。それで途上国は「新国際経済秩序(NIEO)」を要求した。70年代の第二次「国連開発の10年」は保健や教育、住宅など生活に最少限必要なものを満たす社会開発に重点を置く開発戦略をとった。そして70年代半ばから「国連婦人の10年」が始まり、平等、開発、平和の三大目標を掲げて「開発に女性の参加を」と呼びかけた。

もともと女性はある意味では開発にすでに参加していた。途上国では食糧の生産の半分以上は女性が担ってきたと言ってもよいくらいだ。そして工場でも農村でもプランテーションでも低賃金で従順な女子労働者として働かされてきた。それに、家内労働やインフォーマル・セクターなど無償または非常に低い収入で、GNPの計算に入らないような形で開発へ参加させられてきた。つまり、

生産し暮らしていたのに、上からの開発で女性の立場がさらに弱くなる。例えばマレーシアでは、いわゆる農協のような組織、政府の息がかかっているのだが、そういう組織を作られてそこを通じてしか肥料や農薬を買えない。そういう農民をコントロールする組織は全部男性が牛耳っていて、女性の村での発言権は弱められてしまう。クレジットなども男だけに認め女性がお金を借りられない場合も多い。

以上がここ二、三〇年の開発政策が農村の女性に何をもたらしたか、という実態である。アジアでは七、八割の人々が農村に住んでおり、ゆがんだ開発あるいは低開発とよばれる状況が人々、特に女性にとっていかに深刻かがうかがえる。

◆「輸出加工区」方式の工業化

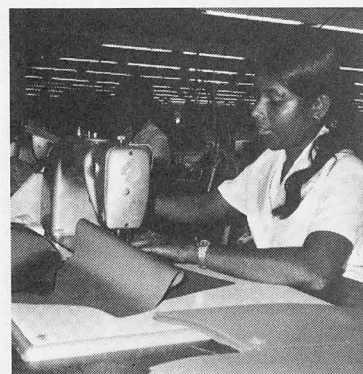
さらに開発のもう一つの分野は工業化である。アジアといっても、工業化の進み具合は国によってずいぶん違う。大きく分けて、東アジアの韓国、台湾、香港などは工業化が最も進んでいる地域で、新興工業国(NICS)と呼ばれる。シンガポールを加えて、「四匹の龍」ともいわれる。それから東南アジアのASEAN六カ国(タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピン、インドネシア、

ブルネイ)は工業化も行なわれているが、農村との格差はまだ大きい。そして、南アジア(インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、ネパールなど)は工業化がおくられていて、最貧国も多い。

しかし、どの地域でも工業化を目ざしていて、共通しているのは、程度の差はあっても先進国本位の工業化であり、新しい植民地主義ともいえる。

その典型的なやり方が「輸出加工区」である。工業団地を作って、「ノー・タックス、ノー・ストライキ」などの優遇措置で外国企業を誘致して、物を加工してそのまま輸出するという仕組みだ。このような輸出加工区は、第三世界の国々に続々作られて五、六〇カ所になったが、半数以上はアジアに集中している。

繊維、電子の二大産業が中心で労働者の八割は十代で未婚の若い女性である。農村やスラムから出てきて、低賃金で単調労働を深夜までやっている。農村では女性が伝統的な共同体社会で家族に扶養されていたのは発言権も弱い、たとえ安い賃金でも自分でかせぎ、仕送りすることができれば自信も持てるという面はある。しかし、フィリピンのバタアンや台湾の高雄、マレーシアやスリランカの輸出加工区を見たが、色々な問



スリランカのカタナヤケ輸出加工区の縫製工場で働く女子労働者たち

題が起こっている。毎日顕微鏡をのぞいて小さな部品を扱っているうちに目をやられ、二五歳でメカネをかける「おばあさん」になるとか、出来高払いで話しかけることもできないほど激しい労働で体をこわしたり、職業病も出ている。日本式経営で、QCサークルを作らせて品質競争をやらせたり、毎朝、朝礼をやって社歌を歌わせてたりしているが、アジア女子労働者のメリットと先進国企業誘致のセールスポイントである従順さを日本式経営で利用し、さらに強めている。

◆開発戦略の変遷

農業や工業での開発がアジアの女性たちにどう影響したかを今まで見てきたが、ここで開発戦略を歴史的にふりかえってみよう。国連が60年代を「開発の10年」としたが、その特徴はパイを大きくしようということとで経済開発優先、GNPを増やそうとした。パイが大きくなれば貧困も解決するという考えだったが実際

搾取の対象としてネガティブに開発の中に組み込まれてきたわけだ。伝統的な女性差別を利用し、固定化するような開発、女性がこのような開発をと立案したものではなく、男性が決めた開発戦略に使われてきたといえる。

◆これまでの開発——五つの問題点

だから、ここで改めて開発とは何かを問い直さなければならないが、これまでの開発がどんなものであったかを少し別の角度から整理してみよう。第一は、地球規模で貧富の格差が増大した。GNP(一人当たり)が一九五〇年から八〇年の三〇年間にどうふえたかを比較すると先進工業国では二・六倍(四一三〇ドルから一万六六〇ドルへ)になったのに、

低所得国は一・五倍(一七〇ドルから二五〇ドル)しかふえなかった。さらに国別での都市と農村の格差、男女の格差も開いている。

第二は、軍事化、独裁化とセットになって開発が進められた。先進国の多国籍企業と途上国の支配層が結託して開発をやるので、民衆が不満を持ち批判的になるのを抑えたり、他国を敵視して民衆の不満をそらすためには軍事力をしっかり持たなければならぬ。ASEAN五カ国の軍事支出は六九年の一六億三二〇〇

万ドルから八一年に六九億四七〇〇万ドルへと一二年で四・三倍にもふえている。国民一人当たりでは七・九ドルから二六ドルになっている。全世界の軍事費八千億ドルのうち四分の一が第三世界で支出されているのだ。福祉、教育費を上回っている。

農民が食べられなくて十歳ぐらいの幼い娘を売春宿に売らねばならない一方で、これだけばう大な軍事費で軍隊を養い、それに抵抗する人々を抑圧し、殺しているわけだ。

第三は、すでにふれた通り、外国に依存し自立的な開発が妨げられていることだ。投資、金融、貿易、援助などどれをとっても、南の国々の北への従属を深める形になっている。

第四は、環境破壊を引き起こしている。東南アジアの熱帯林が日本の木材伐採やダム建設などでどんどん破壊されていて、フィリピンなどではもう日本に輸出する木材がなくなつたほどだ。マレーシアのペナンでは観光開発で、ホテルが建ち、あるいは工場のために汚水が流れ込んで海岸が汚染し、魚がとれなくなっている。

第五は、文化の危機ということ。多国籍企業は途上国に消費文化を持ち込んでいる。先進国の女性の好みを押しつけ、たとえば日本の化粧品やファッションまで憧れを持たせる。自国の伝統文化を卑下し、物質主義

的価値観、つまり、すべてを商品化し、売買の対象にしてしまう非人間的な考え方に毒される。アジア各国での売春の爆発的拡大もこのような消費享楽文化の一環でもあり、女性たちまでモノとして取引されるのである。これまでの開発は、物質的豊かさを至上目的としたものだった。

◆開発の考え方——二つの立場

結局、開発とは何かは立場によってはっきり分かれる。資本の側と民衆の側と。女大学「開発と女性」第一回で、タイのスリチャイさんが権力側の開発と民衆の側の開発を区別されたように。やはりタイの知識人スラク氏もいわれた。「私の開発の考え方は政府と反対だ。政府は、道路や教会や病院など、物質的なものを作ることを考えているが、それはトップの一〇%の利益になるだけだ。私も物質的開発を否定はしないが、一般庶民、貧しい人々のニーズに合ったものでなければならぬ。まず、衣食住など生活必需品を確保することだ。アジアの米どころタイで二〇%が栄養失調という貧困、社会的不正と闘うこと、それが私の開発の考え方だ」と。

フィリピン、ネグロス島のタイプレス司教は「開発とは抑圧されている人たちが人間性を取り戻していく

解放の過程でなければならぬ」と述べ、フィリピンで二年間暮らし、アジア保健研究所の池住義憲氏も「自由を求め、搾取、抑圧、差別から自らを解放する過程であり、人間回復へ向けての行動である」と開発をとらえる。「開発という名の経済侵略構造」と「人間性回復、解放の過程」という対照的な立場があるわけだ。

◆女性が主体の開発

それは現在進められている悲しき開発に対して、もう一つの（オールタナティブ）あるべき開発、といいかえてもよいが、今、アジアの女性たちは、女性にとつてのあるべき開発とは何かを模索している。ナイロビ会議でもそれが盛んに論じられていた。たとえば、DAWN（新時代のための女性開発オルタナティブの略、夜明けという意味）というインドに本部のあるアジアの女性のネットワークの人たちも来ていて、今の開発のあり方を変えることは世界の経済の仕組みに挑戦することではないかという無力感におちいつてはいかないといましている。何よりも、女性が開発の対象になっていたのを主体になっていく。それには女性がつけていく、エンパワメントという言葉が最近よく使われる。それ

には女性が自分たちの力で意識化されること、組織化されること、そして、これまで男性が方向づけていた開発、性差別の上に成り立っていた開発を女性が問い直し、女性の力で変革していくことだといっていた。それは具体的にはどのような方向なのか。それは、簡単には出せないで、今、あちこちで議論しているのだが、どんな社会を目指しているのかにつながついている。それは抑圧のない社会。女性は三重の抑圧に苦しんでいる。途上国の女性は、外国に搾取され、自国の支配階級に抑圧され、男性に差別されている。そんな抑圧のない社会を作る方向の開発でないといけないと思う。

とにかく輸出志向型の外国の利益になる開発は少くとも拒否して、自立した開発に切りかえていくことが課題だ。そのためには女性がつまみ発言権を持たなければならぬ。つまり男女平等でないといけない。そして、もう一つここで、平和という問題も入ってくる。前にいったように、第三世界で何千億ドルもの巨額の軍事費が浪費されている。軍縮をもっと進めて民衆のための開発に振り向けること。民衆を抑圧する軍隊を小さくすることだと思ふ。こんな風に国連婦人の十年の三つの目標はどれも切り離せないものである。

◆先進国の女性としての責任

ところが、日本の女性が開発の問題を避けてきた。昨年、国連婦人の10年が終わったが、二〇〇〇年への戦略を決めてさらに女性解放への努力を続けることになった。経済大国日本の女性として開発の問題をもっと考えていかねばならないのではないか。その点、欧米先進国の女性たちは、実に積極的に取り組んでいる。ナイロビ会議でも、たとえばスウェーデンの十いくつの婦人団体のワークシヨップは、開発援助がアフリカの女性にどんな影響を与えているか調査結果を討論したりしていた。政府の援助局に女性の視点をいれた行動計画を作らせたという。デンマークの女性たちのワークシヨップも第三世界の女性たちとのネットワークづくりをテーマにしていた。

以前オーストラリアに行ったとき、たくさん女性のグループが「女性・開発・援助」というシンポジウムを開いたり、メルボルンでの「アジア女性ワークシヨップ」で二〇〇人もの女性が研究発表をしていた。アジアの問題に取り組んでいる女性の層の厚さに驚いた。開発のことをやっている全国の女性グループが「女性と開発ネットワーク」まで結成していた。南北問題や途上国の問題を理解す

る「開発教育」も女性たちが熱心に行っているが、開発の問題はどこかよその問題ではない、自分の国の政治や経済のあり方の問題、自分自身の問題というとならえ方をしている。最初に白保のことを話したが、開発の問題は日本の問題であり、また、アジアの国々に対して日本が何をやっているかという問題なのだ。そして、日本が明治以来進めてきた近代、西欧をモデルにした開発が日本の女性に何をもたらしたか、日本の近代をもう一度点検し直すことだ。内には女性差別などさまざまな差別をかかえ込み、外には軍事的、経済侵略をしながらの開発であった。そうして経済大国にのし上がった。

私たち日本の女性も、日本の開発のあゆみを女性の視点で問い直し、途上国で抑圧につながる開発をやっている日本の企業や政府援助を監視していく責任があると思う。それには私たち女性が、色んな意味で力をつけていき、アジアなど途上国の女性たちとのネットワークを深めていく。アジアと深くつながっている私たちの生活を見直していく。日本の女性たちは、自分たちのことしか考えないのか」と第三世界の女性たちがきびしく問いかけている。「開発と女性」について考え、行動してその問いかけに答えていきたいものである。

女大学

タイの農村の暮らしと日本とのかかわり

スリチャイ・ワンゲオ

近代化という名の農村破壊

先日、栃木県のある町で出会ったタクシートの運転手さん。タイに行つたこともないその彼が「タイ人はあまり日本人が好きではないね。反日の動きがある」と話すのです。また、大阪で講演した際、日本の援助が役に立たないなら止めればよいとまじめなサラリーマン氏が発言しました。ここでなぜタイ人に対してこんな見方をするのか、反日とは何なのか、考えさせられた訳ですが、本日はまず日本の援助があつてもなくても存在するタイの農村が、ここ二五十年の間に近代化によっていかに変化してきたのか、この変化に対してタイの農民が、そして権力者がいかに対処してきたのか、そして、日本とのかかわりについて、農村社会・農業問題という視点から話そうと思ひます。

一九六〇年に、タイは経済開発に乗りだし、工業化に着手。その資金源として換金作物（タピオカ、コーンなど）中心の農業政策を実施しま

した。外国の資本と技術を導入し、開発委員の手による上からの欧米式コミュニティ・デベロップメントは、農村に大きな変動をもたらしました。六〇年代後半には、特にダム建設、村の電化計画といった大型の経済協力プロジェクトが実施され、村の基本的な構造は大きく変化しました。もちろんこれには入札の段階から日本の企業がからんでいました。

こうした上からの経済開発は、経済全体としては比較的高い成長率をもたらしました。農業では特に換金作物の生産が急増、新しい土地の開拓も進みました。

また、道路（一部はヴェトナム戦争用の戦略道路）の建設も米から換金作物への転換を助長したのです。

しかし、一次産品の価格が七〇年代に入り低落すると村の生活は大変な状態に陥ってしまします。例えば日本は経済協力でつくらせたとうもろこしを買わなくなりました。七〇年代に入ってから、農民が長い列をつくり米を買うとか、米を運搬する列車を止めて米を奪うといった、

今までにない現象がおこってきています。

一方、六〇年頃に国土の六割を占めた森林は、七〇年代の半ばには二割に激減しました。東北や北部の一部ではひどい干ばつの被害が発生するようになっていきます。村に仕事はなく、青少年や若い女性、時には子供までも村を離れざるを得ません。こうした村の生活基盤は崩壊してきているのです。もちろん昔から出稼ぎはありましたが、現在では大規模に制度化化されています。

私の出身地のランブンから北のチエンライ県ドカンタイという所は、サービス産業に従事する女性たちの出身地です。もちろん出身地はさまざまですが、みな経済的背景から村を離れざるを得ません。

国はメンツの問題で、こういうことを言いたがりません。あるいは、サービス産業の女性たちが村に寺を建てたとか、弟を学校に行かせたとか、借金をかえたという報道を県が非難し、小学校レベルでの純潔教育を強化したこともありましたが、な

ぜ出て行かざるを得ないのか考えないのです。農村開発員はよくやっている人もいますが、村でキーづくりの職業訓練をしたりしている例もあります。村中でつくってどうするのか、問題です。婦人のNGOの中でも、恥ずかしい職業につくのは止めてと説教するものもあります。

でも村人は何が問題なのか知っています。ランナータイ王国の王族の親せきが、かつてこうした村で北部の恥だと説教したことがあるらしいのですが、村人はこれに対してバカヤロウと言ったそうです。こうした女性には教育もないし、親や家族のためにやらざるを得ないのです。村に帰っても村八分にはされないし、認められていません。村人たちは、こういう問題は他人にはわかってもらえないと考えていて、絶対話しません。

この問題を深く追求している私たちの友の会がタイにもあり、国際レベルのネットワークをつくらうとしています。こういう小さな金もないまじめなグループと日本のグループとの具体的な交流が必要だと思ひます。タイの性道徳は良くないという先入観を持たずに、タイの女性が困難な状況の中でどういう判断をしてきたかという人間としての対応を見つめ、日本の女性の地位も同時に考

えるというような交流ができるのではないでしようか。

六〇年代以降、開発計画によって高い経済成長が達成されているにもかかわらず、かつて村の基盤が崩れてきました。また、七三年、七六年と政変が重なり、何かがおかしいという感じが存在していました。それが七九年、第四次五ヶ年計画の総括のとき統計的に数字として明確にあらわれたのです。バンコクとその他の地域との格差の問題です。バンコクは人口だけでなく雇用機会や生活条件の面で突出してきました。例えば一定人口当りの医師の数は、農村の百倍以上も高いのです。

七九・八〇年頃は、悲惨な児童労働の問題が新聞をかなりにぎわせた。この問題に対しては政府の圧力にもめげずNGOレベルで子供財団をつくるなど、真剣に取り組む努力があります。また、七九年の第四次五ヶ年計画の総括時に、米輸出国であるタイで五万五千人もの就学前の子供が栄養失調で死亡していることも明らかにされています。

更には、テレビなどを通じて都市の近代的な消費文化が宣伝され、母乳より粉ミルクが氾濫。しかも政府の政策や多国籍企業、外国援助もかかっています。村の開発委員が無償援助の粉ミルクを配布するという事態もおこってきています。

すすむ開発独裁

以上、村にとって近代化とは、「静かなる暴力という近代化の進行」といえます。更にゆゆしきことは、この過程で、村の生活がかわっただけでなく、権力が軍・官僚・企業に集中され、底辺の人々の声が反映されなくなってしまうことです。近代化の過程で権威主義体制が強化されてきたのです。

政府も第五次五ヶ年計画で初めて農村開発を明確に出し、貧困地域の指定、村人の参加が唱えられています。でも一方で、例えば、一九七六年にはタイ農民連盟は違法化され、



バンコクのスラムで行商する親子

坊さんが開発するのか、赤ではないかと見られたこともあったようですが、今では政府にも役だつというところで賞をもらっています。「坊さんは民間部門だ」これがチュラロンコン大学で話を依頼した時の最初のこ

とばであつたのがとても印象的でした。

日本の援助の中身は？

もちろん成功したり、不成功だったりではあるけれど、いろんな形で自立の動きが始まってきています。

日本とのかかわりに触れます。日本の経済協力は賠償の歴史を通じて、一九六〇年代から開始されてきています。どういう訳かアジア志向が強いのです。その中身を見ると問題があります。まず、無償、有償にかかわらず日本企業とのかかわりが大きいことが言えます。タイの建設業界は入札に参加できないと批判されています。

もあまり追求していないし、人々の関心がないのが不思議です。タイ側にもいろいろ問題があると思います。タイの官僚からも、無償援助でもらった後のアフター・ケアをどうするかを問う声はきかれません。

第三点目として、一九六一年から八一年の二〇年間の日本の援助の三七パーセントは電力関係になっていきます。日本の援助はあまりに目立つことをねらうというタイ側の批判があります。例えば、獣医の友人が、牛の病院を地方につくりたいと言ったが、日本側はバンコクを主張したと言っていました。つまり、人々にとっては何のためなのかわからない援助なのです。

こうして援助の中身、特徴を挙げると中々課題も挙げてきましたが、まだまだ市民レベルの調査が不十分だと感じます。市民という立場から、タイの村人と一緒に考えていくことは可能です。上に任せたり、新聞を読むだけでなく、具体的に、市民という立場から、日本とタイの村との関係を検討する必要があると思います。

五〇数人の指導者が虐殺されています。村レベルでの反共的民兵組織がつくられ、自主的な組織はつぶされて上からの近代化、軍事化が進められてきています。

矛盾を政府も認め、改善しようという動きはありますが、本質的には従来の近代化とは何ら変わりません。外国のまねではなく、タイ文化を大切にしたい開発をと言いますが、この場合は、画一的な内務省の命令で、ゆいゝを復活せよということ。政府の予算不足から農村開発への民間参加を提唱しても、民間とは企業のことを示します。

武装のみならず、考え方や組織にも関連する軍事化、つまり上からの組織化、総動員体制がすすんできています。民衆が、勤勉がまんすれば近代化できるとか、あまり考えない方がよいという考えが社会的な規律になっていきます。こうした社会規律を強調する広い意味での軍事化が、開発と重ねられ、日本や韓国を見よということとともに進行しています。いわば「開発独裁」の進行です。

ちなみに、アメリカとの関連で言えば、七三年以降の反基地運動と国際的な応援のため、七五年以後米軍基地は撤退しました。しかし今でも動く基地である船が寄ります。また八五年のはじめ、F16の購入をめぐ

人はバカではありません。自分たちの経験と組織を持っています。それを無視して官僚は日本の共同組合のような組織をつくらうとするなど、上から複雑な組織を自分の業績のためにつくろうとしています。

カナダとか西独のNGOの援助の中には良い例もあります。東北タイにおけるカナダの援助は、技術を持ちこむのではなく、昔食べてきた魚が農薬で汚染され食べられなくなっている点に対し、昔のように魚を食べられるように協力しています。カナダは特に開発協力の理念がはっきりしていて、内政干渉を理由に失敗を認めることを拒否するようなことありません。

国家は、結集する力、国力が強いことを望みます。タイでもそうであり、例えば単一民族性が強調されませんが、日本の方がもつとその力が強いのです。画一的な平均的な日本人が望ましいとして管理します。国家とすれば、一体感をつくりやすいのです。こうやって日本はどこへ行くのでしょうか。

情報化社会といいつつ三浦事件の報道ばかり。世界一ということばにまきこまれて自己アイデンティティがうすれてきています。国際化といいつつ、日本の特殊性、「日本は一つ」を外に対しては強調しています。こ

って議論があり、結局、こうした社会問題を放置したまま購入が決定されました。

一方で、タイでも人々は、平和と人々のための開発は不可欠だと思っています。八五年八月には平和運動家が一日ハンストを実施したり、はだしのゲンを訳したり、日本の反戦映画を上映したりしました。そして運動は続いています。

自分たちの手で

「開発」をすすめる

こうした問題に対して人々はどうのように対応してきたのでしょうか。食べなければならぬので、まず出稼ぎをします。できなければ、他の方法で対応します。ブラリムのある村では、若者組が共同組織をつくり、村祭りを復活させ、叔銀行や農民の精米所をつくっています。しかし彼らは、役人とのめんどろな関係等避けるために農民組織として政府に登録していません。このように権力も富もなく、官僚との協力もない人が組織づくりをしています。

また、奨学金を出して貧しい子供たちを学ばせていたチェンマイのあるお坊さんは、勉強させた子供が村に帰ってこないことを憂慮し、村にあうような開発のための若者の組織づくりに努力してきました。一時はなぜ

うして英国病にかからないように、日本人の画一的自己イメージがつくりあげられているというのが主流です。私の知る日本人は全然似ていないのですが、同質性のイデオロギーが強く、多様性を認めません。経済成長の理由は単一民族だ、と犠牲になった少数民族を無視して言えるのです。

これに対して今ある指紋押なつ反対運動などは、日本の単一社会を破壊する恐ろしいものと国などからは見られています。

市民として、いろんな民族があり得ず、異文化の人々と一緒に生きようとはしない主流の流れに対し、他民族を考え、歴史の流れを反省する人も日本人として多数います。つまり、日本人は画一的ではないし、日本人だからどうだということは一概にいえません。個人的に自主的に各各の感性を失わずに生きるためには、外の人々との交流が必要だと思っています。そうしないと、日本人の脳や文明の優越性を強調するようになってしまつては大変です。

そうではなく、さつきふれた別の意味での日本、単純でない日本。日本人の可能性はここにあると思います。そういう意味で、今日ここにみなさんとお会いできて光栄でした。

(まとめ 小泉順子)

女大学

市民の海外協力

——バングラデシュの実践から——

シヤプラニール市民による海外協力の会代表

大橋正明

タイとバングラデシュの農村では非常に違う点があるのではないだろうか。あるタイのソーシャルワーカーは、自分達の持っている農村のよき共同体を「開発」が壊している、という意識があると言っていた。

バングラデシュでは事情は逆である。農村に、強い絆をもった共同体はない。また回教徒であるせいもあるが、農地や農業に対して、先祖伝来のものだからとか神様が実りをもたらしてくれる、といったような想い入れが少なく、あまり固執しない。だからバングラデシュの農民たちには、タイの村人のように「守るべきもの」は、あまりはつきりしていない。貧しい農民は、地主や金持ちたちとバラバラに向い合っているし、また総体的には金や物が豊富になる近代化に期待しているように見える。

この国は今でこそ、世界でも最も

貧しい国といわれるが、歴史的に非常に豊かで高度の文明を産み出した国であった。例えば元タインドは文明の発祥地である。一六世紀に成立



託児所で子供を預けている間に職業訓練を受けている女性（バングラデシュ）

今女の子が四人、男の子が二人いる。彼自身は一二年、学校に行ったがほとんど読み書きが出来ず自分の名前が書けるだけ。彼の父の代には、12ピーガー（1ピーガーが3/4反）の土地があったが、兄弟三人で分けたから、一人あたり4ピーガー（3反）もなかった。でも、2.5ピーガーを71年の大洪水の時に、74年の飢饉の時に売ってしまったので、1.5ピーガーしか残らなかった。半分に米、半分にジュートを作っている。この他に小作で耕しているのは4ピーガーで、2.5ピーガーが米で1.5ピーガーがジュートである。土地の持ち主は彼の実兄で都市に出て勤めを持っている。実兄は、年に一回か二回、村にきて小作に出した土地からの収穫の半分を売るか、持って帰るかする。

アシュトゥーラさんの家族は長女が嫁いでいるので七人だ。一人当りの年間の米消費量はバングラデシ

したムガル帝国の時代には、細い糸で手織りにされた薄地の「ゲツカ・モスリン」は、世界の最高級品として一世を風靡していた。ところが、英国人は英国製の機械織りの布地を売りつける為、職人の指を切ってしまったという。いずれにせよ、当時一五万人いたゲツカの人口は三万人に激減し、ゲツカの周辺は木綿織布工たちの白骨でうまったといわれている。ベンガル地域はインドの穀倉庫であった。また文化や言語にも誇りや愛着を持ち、アジアで初めてノーベル賞を受賞したタゴールという詩人・芸術家を生み出している。

しかし、第二次世界大戦前後の頃

から、経済的に下落し始めている。今現在貧しいというより、毎年増々貧しくなっている、と認識した方がよい。

毎年援助はたくさん来る。日本は年間五〇〇億円、日本の国民一人当たり四〇〇円送っているし、むこうでも一人当たり五〇〇円づつ受取っている勘定だ。けれども、一〇人中九人

ユ平均で180kg。子供は大人の半分の量の米を消費するとして計算すると、この家族が必要とする年間の米の量は、940kgになる。

さて生産の方はどうだろうか。一

般に米は年二回穫れるところが多い。うまく乾期に灌漑すれば三回もできる。ここでは年二回、めずらしく日照りや洪水にもやられず、平均的な収量が確保されたという。全部で325ピーガーの田んぼから、約1120kgのお米がとれるはずだ。

しかし、まず2.5ピーガーの小作料

としてそこから取れた分の丁度半分430kgを手離さなければならぬ。残りは690kg、さらにここから種子や肥料などの代金や牛の借賃などを支払わなければならないので、恐らく手許に残る米は、一年間に必要な940kgの半分もあればいい方だろう。つまりアシュトゥーラさんの場合、430kgの小作料を払わないですむなら、どうにか家族みんなが一年間食べる分のお米は、確保できるのだ。

足りない分を、彼はジュートやタバコ、小麦などで補っている。彼自身は減収にやらないというけれど、あの里の村で日雇いの農業労働をやると、一日の賃金が15タカ（150円）だそう。これで米が約2kg買えるけれど、七人家族が三回腹一杯食べるのにはちよつと足りない。それに日雇いの仕事は農繁期には毎日やれても、

まで「生活は毎年貧しくなっている」という。日本の高度成長時代に育った僕と逆の感覚をもっている。「昔は卵はしょつ中食えた。卵は客に出す最低の料理の材料だった。ところが今や、一週間に一度卵を食べることも大変」とゲツカに住む中産階級の男がいう。つまり援助の中でGNPのレベルは上がり、首都の一部には豊かになっている層がある、という二極分化が起きているのだ。

貧しくなっている理由はいろいろ

あるが、まずは植民地政策に端を発する。

①英国人は近代的な土地私有制度を

導入し、租税徴収人（ザミンダール）を決め、その土地をその人の私有地とした。さらに直接耕作者の上に中間的徴収人がトツプまで何段階もあるという搾取構造が出来上がった。

②英国は、綿工業を破壊し、商品作物としてまず染料の藍、そして次にジュートを導入したが、これらはやがて化学染料や合成繊維の登場によ

ってダメになってしまった。

閑な時はまったく仕事が無くなってしまふ。その上、彼は借金をしている。82年牛を買う資金として1550タカ借りた。85年に1500タカ返したのだが、まだ2000タカ残っていると云われたそう。本人は読み書きができないので、利子計算をごまかされても何も解らない。で彼は、このままにしておくとオマワリが来て自分の土地を取り上げてしまふのではないかと、しきりに心配していた。

ついでに彼の日常生活を、ちよつ

とのぞいておこう。昨日一日のメニューを聞いてみた。朝は、前の晩の残りのごはんを水に漬けておいたものを塩と青トウガラシをおかず食べたという。パンタバートと言って、貧しい農家のポピュラーな朝食だ。昼食はごはん、カボチャのカレー。夜も同じだったそう。一日三回食べられるのは、恵まれている方だ。

シヤプラニールの活動

今のバングラデシュには、アシュトゥーラさん以下のような生活をしている農家が、全体の六〇%を占めている。くどいようだが、その割合は年々増えつつけている。彼らを私たちは「土地無し農民」と呼んで、私たちの協力活動のターゲット（対象）としている。

①組合づくり

土地無し農民やその奥さんたちの

③人口が多いことではなく、人口増加が急激すぎて、食糧供給量とのバランスがとれない点が問題である。山が多い日本と比べるとバングラデシュは国土の七〇%位が田畑で、一人当りの耕地面積は日本より広い。

現在、収穫高は単位面積当り、日本の四分の一に過ぎないが、今後農業投資をすれば十分食糧を生産できる可能性は充分ある。

④不完全な農地改革のため、地主、小作関係が厳しく残っていて、収穫の丸々半分を地主がとる。生産者は労働意欲がわかず、肥料や農具を買えない。小作人が、耕作用の牛を借りたり、種子や薬、肥料などの費用を負担する場合も少なくなく、実質的取り分が三分の一になってしまふ。

⑤ムスリムの相続法により、土地は子供すべてに分割される為（女子は男子の二分の一）私有地の細分化が進んでいる。あまり小さくなると経営は成り立たず、農地を手離してしまふ。

乱暴な言い方だが早い話、農地改

革をきちんと実施すれば、かなり生産性は上がるだろう。その具体例をあげてみたい。刈分小作がなくなれば農民はちゃんと喰っていきけるという例だ。

アシュトゥーラさんは四八歳。子

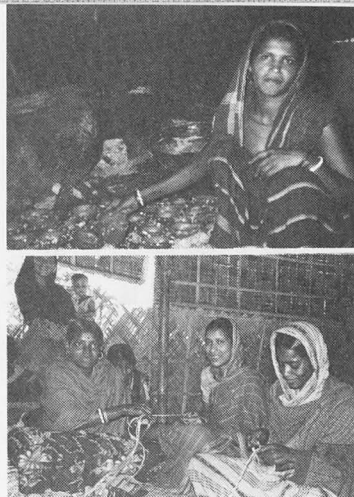
供は一二人生まれたが、六人死んで

組合づくりをしている。二〇人位で毎週か隔週に寄合いをもつて、その時に10円か20円づつ集めて貯金をしていく。

こういった組合がベースとなつて、以下に挙げるいろいろな活動が展開される。初めの頃組合は10位しかなかったのが、今や100近くもある。だからある村や郡などで、そういった組合が連合して、みんなで地主や村長の不正や横暴に文句を言うようになっている。また政府の病院や農業開発公社などにも、ワイロを取らないように、と土地無し農民として要求出来るだろう。村や郡の選挙にも、大きな影響力を発揮している。

②教育プログラム

簡単な掘立て小屋を建て、午前中は子供に、午後はお母さんに、夜はお父さんに、六ヶ月間文字を教える。対象は組合員家族、土地無し農民に限る。子供は一年間預り、二年目からは、村の公立の小学校に編入させる。子供がなぜ学校へ行けないかという、学費はタダでも、上着、ノート、ペン、石板が必要だが、親が買ってやれないからである。シヤプラニールでは、小学校に編入したあとも年間1000円づつ五年生が終了するまで援助している。アシュトゥーラさんの子供も学校へ行けるようになった。成人クラスの方は「被抑圧者の教育学」（パウロ・フレイレ著）を実



貧しい人々のための銀行から融資を受けて、収入向上のための菓子作りや手工芸品を作る女性たち(バングラデシュ)

践した識字教育をしている。自分の身の回りの物事をわかりやすく、興味を持って勉強していくようにしている。保健衛生から、地主との交渉のしかた、契約関係で欺されぬよう、自分の権利まで、生活の各情景を描いた絵を中心とした教科書を使いながら、必要最少限の文字を学ぶ。この識字教育は、大人の意識改革を目指したものである。組合のリーダーと組合員の関係にも、地主・小作関係のような、三角形のピラミッドができてしまうこともあるので、一人一人の意識を変えることに、タッチしていく。

③井戸、便所の普及

極力、物をあげないようにしている。もらったものはいいかげんに使うというのは日本でもバングラデシュでも共通する人間の性。だから手押しポンプ型の井戸や簡易トイレも、彼らがある程度負担をするようにして普及をはかっている。

④収入向上プログラム

先程述べたように、組合単位で共

同貯金をして、それを基に組合や組合メンバーの収入が向上するような諸活動をすすめている。初期の頃には、各組合にこちらから資金を貸したりしていたが、組合の基礎が充分できていないと不正が起きたり、数多くて全部にはとても資金を回せないで、今は彼らの資金だけで、事業をするようにしている。組合単位で銀行からお金を借りられるようになったら、もっといいだろう。以下に主な収入向上活動を紹介した。

①資金の貸しつけ…村人が病気になるったり、娘が結婚するなど、たくさんのお金が必要となった時、普通は村の金持ちのところへ行って借金してくる。ところがこの利子たるや月に10〜20%にもなる。あのアシュトウーラさんも、長女を80年に嫁つかせる時に、持参金や諸費用に三三三三三(三万円)もかかったそう。農業労働者の一日の賃金の15タカ(150円)の二百分分、つまり日本でアルバイトして一日五千円もらって生活している人が、百万円を一度に支払うのと同じことだ。だから、ちょっと借金すると利子ですぐ二倍になってしまふ。その替りに、組合の共同貯金をもっと安い利子で困っている仲間には貸しつけようというのだ。結局これは、貸しつけられた本人にとっても、また利子が入る組合にとつ

ても生活や収入が確保されることになる。

②生産手段の共有…今まで地主や金持ちのところから、安くない借り賃を払って使っていた農産物を運搬したり人を運ぶ自転車力車や小舟、田畑を耕すのに必要な牛などを、組合が買って、メンバーにより安い料金で貸しだす。

③女性による手工芸品組合…74年にボイラというところで始められたこれは今でも、自分たちだけでうまく運営を続けている。自分たちの家でも使うためにつくるジュートの吊り飾りや竹のカゴなどに、デザインと規格を加えたものをつくるのだ。それを、私たちのような非営利の民間団体を通じて外国に輸出する。最近では売れ行きが悪くなって注文が減ったと嘆いていた。上手な人は、月に200〜400タカ(2000〜4000円)も稼ぐ。そうなるとう然家のなかでの発言力も増すだろう。夫を亡くして、息子を喰わせている小母さんもある。

④その他…ニワトリ、アヒル、ヤギの生まれたてを買ってきて、大きくして売る。バングラデシュでは、にわとりは放し飼いにしており、飼料は不要である。卵ないし鶏を売るのも近くのバザールなので、交通費など、一切の費用はかからない。100タカで買った子やぎが、1000タカで売れたら、

もうけの900タカの半分は自分に、半分は組合の貯金にして、また、組合から借りる。

また女たちは、タバコ、玉ねぎを収穫直後の安い時に買って置き、高くなったら売りに出す、という投機をやる。

女性の地位

男性側からの離婚が自由なので、地域差もあるようだが、女性の持参金目当てに結婚し、すぐ離婚してしまふ例が少なくない。女性はパルダールという布で顔を隠し、外に出れず、社会的地位は低いようにみえる。しかし、家庭内での力は案外大きく、母親は、発言力が強かったり、財布を握っていたりする。

男性の来客には応待してはならないが、料理を運ぶベッドを用意するという接待はみな男の役目だ。また、男性は、自分の洗濯をしたり、買物に出かけたり、種々の家事を担っている。

しかし、相当豊かで教養もある村の家庭でインタビューしたとき、自分の母親の名前や年令を、子供たちは知らなかった。つまり自分の「お母さん」ではあっても個別の名前をもつ社会的な存在としては充分認識されていない、ということを示しているのではないだろうか。

シャプラニールの方針

現地に日本人は非常に少ない。なるべく、バングラデシュの人達がやる。彼らに代わって僕らにできることはお金位のもの。お金を作ってもっていくという一つの流れが必要である。向うにボランティアとして行って何か役に立つ訳ではない。向うの人達がやるのを資金面、その他でお手伝いする。今、日本人が三名いる。バングラデシュでのスタッフは四〇〜五〇人。識字教育の先生を入れると二百人近くになる。スタッフにわずかな給料を払っている。その人が自転車で村々を回って、女の人もいるが、組合作りを指導している。僕らはそれを側面的にサポートしている。例えばダッカに居て政府とのやりとりをする。国連機関のユニセフだと井戸をくれたりするの、交渉に行く、僕らが現実いろいろんなことを向うで勉強して、初めて援助のやりかたがわかる場合がたさんある。こういう問題なのか、という向うの人の視点を学ばなくてはいけない。

日本政府の援助の問題点

日本政府は食料増産援助という美名のもとで、高収穫品種の普及を押し進めようとしている。つまり化学

肥料、灌漑用の動力ポンプのエンジンを入れている。バングラデシュ側にはその受け手として農業開発公社とか農業協同組合省がある。村レベルではお金を三〇万〜四〇万円貸してこれらの普及をはかっている。地主など金持ちは、銀行にコネがあるし、ワイロも払えるし、難しい申請書もスラスラ書けるし、担保の土地も持っている。そのための資金を借りて灌漑用の動力ポンプを手に入れる。日本の政府が「よいことだ」としてやっている食糧増産援助を、僕は良くないと考えている。というのは結果的に、わずかな土地しか持っていない連中は、土地を手離してしまふことになるからだ。高収穫品種はうまくすれば、普通の二倍とれ、もうかる。農業を入れて多国籍企業との関係ができてくるという問題もある。しかしそれ以上に問題なのは、ポンプを手に入れて、食糧を増産して儲けた地主や金持ちが回りの土地をさらに買ってどんどん肥え太っていくことだ。

バスの中で偶然隣りあわせになったおっちゃん、灌漑ポンプを入れて、とっても収穫が増えた。それに自分のところでポンプを使わない時は、汲みあげた水を回りの農家に売ってやってくる。もうかった金で、土地を増やしてるよ」とうれしそうに語っ

たことが、今も忘れられない。もちろんこの他の問題もある。機械のメンテナンスができない。技術指導が続かなかった、など。

青年海外協力隊も入って食糧増産援助をたくさんやっている。政府は、パイが大きくなれば下の層へのおこぼれが大きくなると思う考えである。中農の水準が上がらないとダメだといふ。

僕らはそうは思わない。市民による海外協力は、普通の人として、普通の人の生活、貧しい人の生活が少しずつでも良くなっていると思う、そういうレベルの協力をすべきだ。その視点から僕らは日本の援助政策はおかしい、と言っていく。その視点で初めて見えてくるものがたくさんある。国家という視点で援助をすると、ダッカに五つ星級の大きなホテルを建てる。それで外貨収入が上がって米、食糧を買いつけているからいいだろうと、向うの論理は発展する。僕らはそれは必要かも知れないけど政府が私たちの税金である援助でやることは、と思う。それよりも、もっと貧しい人たちのところへ直接届くような工夫をしたらどうか。例えばスウェーデンはあるNGOを通じて、村の小学校をほとんど建ていった。もともとそのNGOは「小学校へ来れるのはまだましな

家庭の子供たちだけだ」と言っているプロジェクトを中止してしまったが、こういう話が日本の政府援助についても出来たらいいなあと思う。とにかく貧富の差を広げていくことだけはやめてほしい。

援助幻想をとつばらえ

NGOだからいい、ということはない。日本のNGOの中には、大東亜共栄圏的な発想をする民間団体もある。日本の国家政策の一步右なり先を進んでいるように見える。もつとオープンに、日本の援助のあり方を、政府も民間も議論していく必要がある。

シャプラニールの活動は一日二食ぐらいしか食えない水準を、どうもう一步上げられるかに重きを置いている。それは経済的にもまた社会的にも。ちょっとした金銭的なインプットや工夫でもって、生活状態を良くする、ことに力を入れている。

日本国内で手工芸品を売ることが、女性同士の協力につながっていく、コミュニケーションができるし、考えるきっかけになる。南の貧困は北の豊かさとは表裏一体だから、生活を変えようとしても、具体的にどのようにするのか、具体的に示していくかねばならない。

(まとめ 竹井真紀子)

中原道子

かったのです。

一五二一年以来、マレーシアはポルトガル、オランダ、そしてイギリスの支配をうけました。マレーシアを植民地にしたイギリスにとって貿易が最大の関心事でした。日本の場合は土地の所有が大切ですが、イギリス人は住む人や土地には関心がな

ヒンドウの法典であるマヌ法典は、これほど差別をはっきり法文化したものはない、というものです。

マレー系 50%
中国系 34%
インド系その他 16%

このうち、中国人は町に住み、商業、サービス業につきマレーシアの経済を握っています。マレー人はブミプトラ―土地の子―という誇りを

植民地時代、マレーシアには都市道路、鉄道ができましたが、これらはスズ、ゴムの生産、輸出のためにイギリス人がつくったものでした。

一九八〇年の人口調査（ポピュレーションセンサスレポート）によると、一〇〜一四歳の子供は四三〇〇〇人。人が何らかの形で働いています。マレーシアの人口は一五二六万人と少ないので、かなり多くの子供が働いているとわかります。ちなみに、四三〇〇〇人の内訳は下記の通りです。

女子労働者の職場は、電子産業、衣料、紡績、食品加工等です。

労働者の男女比

一九五七年 女16・7% 男83・3%
一九七六年 女41・33% 男58・67%
働く女性の割合が増えています。特に電子産業で多くの女性が働いています。なぜエレクトロニクスの工場に女性を雇うかというと、女性は忍耐強く勤勉で細かく複雑な作業に適し、すぐくびを切れるので回転率が高いからだといえます。作業を三年やると視力が落ち、赤目になって使いものにならなくなるのです。二十四時間体制で大変苦しい労働です。

エレクトロニクスの多国籍企業は文化的価値観をうねこむことによって農村のマレー人の女性たちを引きつけようとしています。たとえば、清潔でエアコン完備の工場（これは労働者のためではなく機械のため）、BGMが流れている、食堂が無料、送迎バスがある（有料）などといった勧誘があります。アメリカ系の企業では美人コンテストや舞踏会をやり、日本系の場合は家族的労働管理で、父母にお嬢さんをおあずかりする、と言いつつ一度は父母もいっしょに食事やピクニックに行きましよう、とか、監督者をお父さん、お兄さんと呼べたりするわけです。

なぜ町ではなく農村で雇うかというと、町に住むインド人、中国人の女性は付加価値に耳を貸さず賃金の高きだけで雇われるからです。また、政府はプミブトラ政策つまりマレー人優先政策をとり、それでは工場には中国人女性が多かったのに人種の比率に合うように雇え、といったこともあります。

❖女子労働者たちの抵抗

一九八〇―八一年、ペナンで電子産業女子労働者がサボタージュをしました。これは昇給の約束をしていて工場側が低い昇給額を出したため、労働者側が話し合いをはじめ、それが広がったもので、賃上げを獲得しました。しかし一七―八人がクビになり、工場側の管理はより巧妙になつてしまいました。

「世界から」という雑誌のレイチエル・グロスマン「集積回路にくみこまれたアジアの女たち」に、女子労働者におこる集団ヒステリー（アモック）の例があげられていますが、これなどは無意識な抵抗であり、女性労働者の労働状況がある限界にまで達することを表していると思えます。このアモックとは、マレー人特有の暴力的ヒステリー状態で、男性

特有のものだったが近代若い女性もなるといふことです。工場が何日か閉鎖に追いこまれることもあります。解決にはボモという伝統的な男の魔術師を呼ぶしかありません。

女性が工場で働くのはここ二〇年ほどの、歴史がない新しいことです。カンボンから出て新しい社会をつくるということもできていないし、労働争議もしたことがないのです。今は、彼女ら自身がヒステリーにならないで労働交渉をし始めてきた時期だと思えます。彼女らが働く多国籍企業の中で日本は非常に大きな部分を占めています。

私たちは歴史的社会的文化的な場の中で彼女らの置かれている状況を理解しなければならぬと思います。

質問より 文化、制度など――

現在、原理主義的イスラムが強くなりつつあります。大学で女性がベールをかぶるとか、女性が泳ぐのは禁止であるとか、薄暗い所でデートしているのが宗教警察に見つかると問題になる等。イラン革命の影響です。

イスラムがマレー人のアイデンティティです。教育、経済ではマレー人は中国人、インド人に負けています。

――イスラムではハッジといって、メッカへ行きますが、これは為政者も反対できません。これが非常にいい効果をあげます。メッカで新しい情報を仕入れて、革命などの力にするのです。

――東南アジアでは日本に比べて女性が抵抗なく高い責任ある地位につきます。マレーシアでは大学の図書館長、副学長が女でしたが、たとえばこれは早稲田大学では考えられないことです。政府や銀行の上部にも女性がいます。フィリピンでは大学教員の五〇％が女性です。日本はこの面で異常です。

――マレー、インドネシア人の名前は一つで、ファミリーネームはありません。父の名を上につけますがそれは姓ではなく、従って家というものはありません。夫と妻が半々の多系制か母系制の社会なのです。父系はないのです。誰も言わないことですが、強大な国家が成立しなかったのはそのせいかもしれません。

（まとめ 伊藤加芳子）



女大学 韓国の経済成長と女性の地位

矢野百合子

韓国の経済は、一九八二年までの二〇年間に年平均八・〇％という経済成長率を達成し、GNPも八七ドルから一八八〇ドルに上昇した。

この韓国経済の成長は、八〇年代にはいつて若干、速度を緩めてはいが、韓国はもはや途上国ではない中進国として認識されている。この脅威的経済成長は、どのような人々によって支えられ、韓国社会にどのような変化をもたらしたのか――特に直接の担い手となった女性労働者の位置変化を手がかりに、開発政策の及ぼした影響を考えてみたい。

経済開発政策

韓国の経済開発政策は、一九六二年より、五か年単位で計画・実施され、その本来の目的は米国の主とする対外援助依存からの脱却と、自給自主経済であった。実際、第一次計画の第一項として「農業生産力拡大による農業所得上昇」がおかれている。しかし、農業経済に関しては、第二次での「自給自足」が第三次では「主穀自給」というように、回を重ねるごとに目標が下げられている。

これは、開発政策が、生産設備・技術・資本を外国から導入し、輸入原資材加工と海外市場への輸出を主とする、いわゆる輸出産業の育成に重点をおいて進められ、廉価輸出を維持するために低賃金政策とともに低穀価政策を取ったこと。また本来は工業部門の食糧・労働力供給源であると同時に国内商品市場・原資材供給源でもあるべき農村社会の開発が外国市場・外国資材依存政策によって、極めて消極的に進められたことに起因している。この結果、農業のGNP寄与率は、六二年の三五％から、八一年には一八％に下落し、食糧自給率も九一・一％（六一年）から五八・五％（八〇年）に下がった。六〇年には国民の五八％を占めていた農業人口は、八〇年には二八％となり、単純計算で二〇年間に三七六万人が離農を余儀なくされたことになる。農家負債の増大、農業所得の家計費充足率の低下（七二年には一二七％が、八四年では七〇％、農水産部八五年一月発表）が示すように、農村から開発政策をみるならば、零細・小規模の家族労働という農業

の基本的問題を改革できずに、農村を輸出産業の労働力・食糧供給市場とした開発政策の結果、農村社会は以前に増して困窮の度を増してきたといえる。

女性労働者の位置

一九六〇―八〇年の韓国の経済活動人口の増加率は年平均で男子二・四％に対し、女子は四・三％と圧倒的に高い。その進出部門をみると、六〇年には女性労働者の七〇％は農業従事者であったが、八〇年には四六％に減少、代わって雇用労働者が六・四％から二二％に増加している。（表1参照）また、技能工・生産工程従事者・その他単純労働が全体の約二〇％を占め、九・八％の高成長を保っている。

表1 女子の従業上の地位の割合

	1963年	1970年	1980年
自由業	22.2	21.0	23.2
労働者	56.0	50.2	37.3
常雇用	6.4	13.9	22.0
臨時雇	5.0	5.7	9.1
日雇	10.4	9.4	8.3
合計	100.0	100.0	100.0

（出所）韓国経済企画院、Annual Report on the Economically Active Population Survey, 1976, 81年。

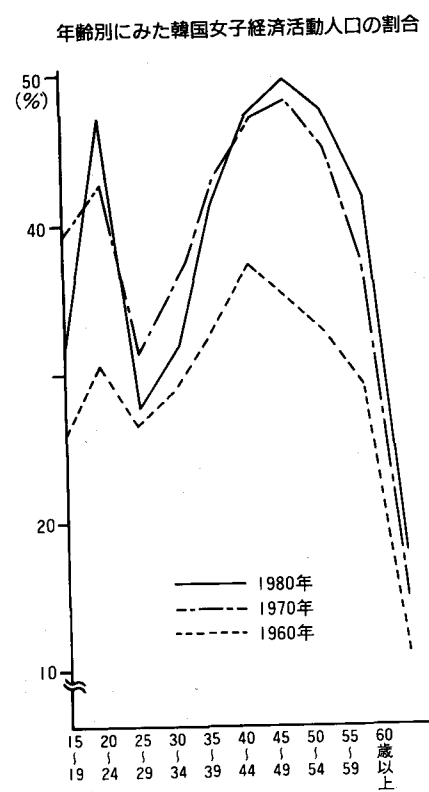
以上の統計は、輸出拡大政策によって生産奨励が重点的に行なわれた繊維・電子等の労働集約的産業に、女性労働力が集中したことを示している。経済開発政策の期間に女性労働の中心は、農業主体の家族労働から、都市産業部門の雇用労働に移り、主に輸出製品製造業を支える役割を果たした。

製造業に携わる女性の状況を少し詳しくみると、増加率は低いものの繊維関係が全体の五五・三％（八〇年）を占めている。また金属・機械製造に一五・二％が従事しているがこの部門の増加率は二一・五％（七〇―八〇年）と高く、開発政策が七〇年以降、輸出向け金属・機械製造優先政策に移行した時期と一致する。また増加率の著しいのはサービス部門で、七〇年には六六％を占めていた個人・家計サービス業にわたり、八〇年には公共・行政・社会等の分野が六九％を占めている。（参考文献 献1、P186）

次に女性労働者の属性による労働市場形成の傾向であるが、(図1)のように、六〇年から七〇年にかけては、どの年齢層においても労働進出の増加がはつきりとみとれる。

産業別には、製造業の繊維・電子では一五・二四歳が七〇%を占め、サービス業では二〇・二九歳が四五%、販売業では三〇・三四歳が四四%を占める。また生産工の七一%は独身であり、反対に農業の七六%、販売業の六七%が既婚者である等、女性労働は個人の属性による市場分化の傾向を示している。(センサス七〇、八〇年)

また就業理由の過半が、生活費補助であることは、女性の社会進出が女性自身の労働意欲の結果というよりは、むしろ都市化に伴う生活困窮に対処する自己犠牲的側面が強いこ



(出所) 韓国経済企画院 Population and Housing Census, 1960, 70, 80年

とを意味している。また、女性労働者の九七%が中卒以下の低学歴である。韓国女性の教育水準は高く、高卒以上が二〇%を占める。しかし、例えば八五年度大卒者一五万人中の約五万人が女子学生であり、彼女らの八〇・九五%が就職を希望しているにもかかわらず、門戸は極めて狭い。八四年度に三〇財閥中、大卒女性を採用したのは一・九%、それも縁故採用で、公開採用は八六年度に初めて行われた。このような高学歴女性の採用忌避は、企業の生産性論と儒教伝統の女性観によるのだが、いずれにせよ、高学歴女性の進出が阻まれる結果、女性労働の社会的・企業内的地位は、極めて低く抑えられている。

産業社会において、男女の賃金格差は前述の諸条件の影響で、極めて大きいといわねばならない。同一職種・同一学歴の男女格差の例として、高卒事務職員の例をあげると、男性の平均初任給は二〇万九千四百七十五ウォン(W)、女性は一五万六千九百五十五ウォン(W)、女性は一五・六九五五Wで入社する段階です。一・三の格差がある。また三年勤続では男性二五万三千八百七十五ウォン(W)、女性一八万九千九百一十五ウォン(W)、格差は拡大する(一九八四年賃金中央日報八五・四・四)。また八四年秋の経営者総会調査では、女性に年齢、職種、配偶者等の限定をもうけている企業が五〇・五%、昇進機会のない企業が三三%、残りの大半の企業でも昇進は部長・班長までに抑えられ、女性が低学歴の生産職として、男性と異なる労働市場として位置づけられている」ことを指摘している。

労働時間は、八二年の労働部調査で男性が一月二二・五・九時間、女性が二二・一・八時間で、以前に比べ時間数は減少しているが、女性の長時間労働の傾向は変わっていない。しかしこれらの数字は、組織労働者を主に算出されており、組織労働者が非農家女性労働者の約一〇%にすぎないことを考えると、実態は、より厳しい労働条件下にあると考えるべきであろう。離職率の高さ(製造で

勤続平均二年、七九年)は、家族の生計を支えるために労働市場に飛び込んだ女性たちが、悪条件の中で、産業社会の下部構造として位置づけられていることを示す。

一方、生産年齢労働者が都市へ流出したあとの農村社会はどうか。零細経営合理化の道を辿らなかった農村では、労働力を補うのは残った人々の労働負担増加によるしかない。労働時間の推移をみると、男女合計では減ってきているが、女性の労働時間は、七〇年の七二・二六時間から八〇年の七三・〇七時間と増加し、男女農業時間比も六二年には七二・二八であったが、八〇年には五七・四四・二六と、農業労働の負担が急速に男性から女性に移っていることがわかる(参考文献Ⅲ、P.193)。七〇年代の女性の労働力率は、都市だけではなく、農村においても着実に増えている(七〇・七九年、農業では四八・二・五四・二、非農業二九・二・三五・九、労働省調査)。また農村ではほぼ全年齢にわたって一〇%以上の進出増加が確認されている。八二年の農村調査(二地域一四三戸)では、半数の農家が未婚子女を働きに出し、農業労働力は夫婦だけで六六%、六〇歳以下の労働力を三名以上有する農家は七%に満たない。また出稼ぎ者の六〇%

は一五・二四歳の未婚女性である。(参考文献Ⅲ)

以上をまとめると、韓国の工業化優先の開発政策は、農村の生産年齢層の都市流出、促進し、特に自己犠牲的な若年女性層によって輸出関連産業が支えられた。また農村の労働力不足は、経営合理化よりは農家主婦を中心とする中高年女性の労働強化により支えられている。彼女たちは、過剰労働によって健康を害しつつ、開発からとり残された農村社会において、労働力としての価値を十分に発揮し、また労働力としてしか存在理由を見いだせずにいる。

伝統社会と女性

「女と干鯛は叩くほどに味が出る」などの諺にみられるように、伝統的儒教社会の中で、韓国の女性たちは徹底した男尊女卑思想に束縛されてきた。この倫理観は、近代化の中で止揚されることなく、むしろ開発政策の中に組み込まれ、再編されて、都合の良い女性像をつくりあげていった。

生む性。韓国の伝統社会における家族は直系家族で、長男相続の連鎖によって維持される。女性は一族の族譜を継承する男子を生むことを、その第一の役割とされてきた。これは法の支配の問題ではなく、「族」

の問題であり、現在もこの意識は根強く残って、女性自身の中に男の子によって自身の地位を保全しようとする男児選好の傾向を生み出している。従ってこの「族」に手をふれずに進められた人口抑制政策は、女性への新たな肉体的・精神的抑圧となつて作用している。直系家族制と、経済上の男女格差を是正しない限り、男児選好は消えない。しかし昔のように生み続けることも出来ない。延世医大の調査では、医学の発達→胎児性別判定→と相まって新生児の男女比が八〇年以降、自然出産比の一〇六対一〇〇から、八五年には一七対一〇〇に変化しているとの報告がある。女胎児中絶によって、伝統と近代化による抑圧が解消されようとする傾向を示すものといえるのではないだろうか。

この他、教育の面でも、現実の女性の社会進出が反映されず伝統的男女観が支配的である。また八四年の男女平等条約署名にあたって、家族法関連条項は保留され、実質的平等は得られなかった。

韓国の経済成長が、女性労働者によって、多く支えられてきたことは事実である。しかしそれは、結果的に、女性の位置を下落させ、疎外した。伝統社会と近代化が彼女たちに

加える抑圧が、政策・法により解消される可能性は極めて低い。様々な女性団体によるアプローチは、従って抑圧の構造の底辺からの主体的変革を中心課題とせざるを得ないのである。

※本稿は、矢野百合子さんの「女大生」でのお話を補足する意味で、矢野さんの論文「韓国の経済開発政策と女子労働者の位置」の中から数字・図表を主に、お話と合わせてまとめたものです。

【主な参考文献】

- I 水野順子「韓国、工業化と女性の役割」『開発政策と女子労働者』アジア経済研究所、一九八五年
- II 韓国基督教産業問題研究院「韓国産業発展の農民経済の実態」一九七八年
- III My Mother's Name is Worry—A Preliminary Report of the Study on Poor Women in Korea—, Christian Institute for the Study of Justice and Development, 1983

(まとめ 矢野百合子・山本有紀乃)



全国学校図書館協議会選定図書
日本図書館協会選定図書

教科書に書かれなかった戦争 Pant3

ぼくらはアジアで戦争をした

内海愛子編
定価1500円

●高崎隆治 ●岡本愛彦 ●飯田進 ●湯浅謙 ●亀井文夫の5氏が語る戦争体験。●天皇が乗るお召列車の位置が5cmずれただけで、機関士はクビになった。そんな時代があった。

梨の木舎 東京都千代田区神田保町1-42 (292)0401

経済評論増刊
市民の海外協力を考える会/編

市民の海外協力白書

●飢えと貧困と私たち
●海外協力の草の根の人びと
●これからの海外協力を考える

定価1300円

絶賛発売中

日本評論社 千160 東京都新宿区須賀町14
電話03(341)6161代 振替東京0=16

女大学

新しいフィリピンと日本の役割

女の立場から

池住圭

フィリピン合同教会の「人権委員会」で働く機会を与えられた私は、日本を離れて初めて、日本での物に満ちあふれた日常生活を考え直す事ができたように思います。今日はその経験から、フィリピンと日本にいる私達の生活がどんな風に結びついているか、ほんの一例ですが、お話ししてみたいと思います。

パサール銅製練工場

マルコス前大統領政権下のフィリピン政府は、大工業化政策の一環として、レイテ島・イサベルに、一九八三年、パサール銅製練工場を建設、操業を開始しました。この工場の三七七のシェアを、丸紅・三井鉱業・ネスコ・古河鉱業が所有しています。眠っている天然資源を利用して加工産業を興し、輸出し、外貨を稼ぐという、東南アジア諸国が目指す工業化政策な訳です。この工場ができた晩には、多くの人々を雇い入れ、現金収入の道を開き、人々の生活を安定させるという、一見誠に結構な政策のようですが、更に大きな落と

し穴があったのです。

この銅製練所は、ボタンガスのサンファンという所に当初建設予定だったのですが、公害輸出という事で一九七七年、住民の反対運動にたいやむなく現在のイサベルに変更せざるを得なかった、という経緯があります。勿論イサベルの住民も、一九八〇年三月二五日には、九〇〇人の住民の署名をもって反対運動を繰り広げたのですが、こちらの方は耳も貸して貰えず、一九八三年に操業を開始するに至っています。

古河鉱業が、一八七七年に足尾銅山でその操業を開始して以来、一〇〇年以上にわたる鉱毒垂れ流しの歴史をみれば、住民の反対運動は、もつともなものです。足尾銅製練所から出る亜硫酸ガスは、付近の全ての山を丸裸にし、渡良瀬川付近の漁民、農民に甚大な被害を与え、谷中村をそのまま水没させています。その銅製練が日本で操業できなくなると、公害規制の少ないフィリピンに、日本企業の肩入れにより、そのまま移動したと云っても過言ではないでし

よう。しかも足尾銅山の汚染は過去のものではなく、現在も続いているのです。

現在、パサールの建設されている地域には、以前四つの村（四〇〇、五〇〇世帯）があり、住民の殆んどは、半漁半農の自給自足の生活をしていました。

パサールの建設当初、パサールは住民に土地を提供すれば、雇用をするという条件を提示し、半ば強制的に土地を取り上げ、海からは遠い収容所のような所へ強制移動をさせました。雇用の実態といえば、建設中は日雇い労働者として四〇〇〇人位の人々が雇用されましたが、建設が済めばお払い箱です。常雇いとして雇用された人は、五、六人しかいないときいております。強制移動により、漁業も農業も取り上げられた人は、当然の事ながら失業し、食べものにさえ事欠いている有様です。失業率は五〇％とも六〇％とも云われています。

失業問題だけでなく、公害も大きな問題です。排水溝近くの海水温度

は、二度上昇したという調査結果もあります。このため魚は棲めなくなり、赤潮が発生したという話もきました。又、海の汚染も、重金属を含む廃棄物により大きな問題です。当然の事ながら煙害もおこっています。

実際にイサベルへ行きますと、海は青く、ヤシの木が繁り、一見穏やかに見えますが、足尾銅山の歴史を考えますと、長年かかって、気付かない内に大きな被害をもたらす訳ですから、ほんとうに恐い事だと思っています。

イサベルから車で二時間位の所にレイテ島の中では比較的大きな、オルモックという所があります。このオルモックとイサベルの間に大きな道路があります。この道路の建設の際も、住民の利益のために、とうたっていました。私の見る限り、とんでもない事です。パサールに物資を運ぶため以外のなにものでもないのです。道路の両サイドには、もともとそこに住んでいた人々が生活をしているのですが、後から建設された道路の方が高いため、一たび雨が降れば、泥水が家の中まで流れ込み、雨が降らなければ、車の通る度に、大量の土煙に見舞われ、家の中まではこりてまっ白になってしまいます。又、パサールで使用する電力を供



農薬のために手足は湿疹だらけそれが進むと肝臓や目が侵される。不妊症や未熟児が生まれる率が高くなる。

こうして、多くのフィリピンの人の犠牲の上で製造された九九・九％純粋な銅は、年間一三万九〇〇〇トン生産される内の七六％が、日本企業により販売され、その販売権は丸紅などの日本企業が独占している訳です。又、日本企業が三七％のシェアをもつという事は、安いフィリピンの人々の労働力を享受し、年間六〇〇万ドルの総収益をあげ、その内の三分の一は日本に持ってしまつてフィリピンの人々はその恩恵に浴せないという訳です。

ミンダナオ島 バナナ農園

もう一つ、別の例をお話ししましょう。

私達が、季節を問わず食べる事のできるバナナの八〇・九〇％は、ミンダナオ島で栽培されています。

バナナの値段を見ただけで、いかに低賃金でバナナ労働者が働かされているか、おわかりと思います。多くの労働者は、季節労働者で何の保障もなく、日給二七ペソ（四五ペソ（二二六・三六〇円）で働いています。バナナ農園も多間にもれず、多国籍企業が支配をしています。アメリカ系のデルモンテ、ドール、チキータ、そして日系のバナナボというブランド名は、日本中どここのマーケットに行っても見る事ができます。

中でも私達に最も関係の深い「バナナボ」と呼ばれるバナナを栽培している、ダバオ・フルーツ・コーポレーション（DFC）のもつバナナ農園について最近行く機会がありました。このDFCが何故、私達に最も関係が深いかと申しますと、それは住友商事が、三六％のシェアをもっているからです。ここで働く労働者が、低賃金の上、劣悪な労働条件の下に苦しめられている事はいうまでもありませんが、今回行ってみてほんとうにひどいと思ったのは、農薬の被害でした。日本などの「先進工業国」と呼ばれている国では使用されない、極めて危険な農薬が、マスク、手袋等の防具なしで散布されています。日本では規制されていますが、フィリピンではその規制がないからです。

例えば、メチル・プロマイド。ムコ病というバナナの病気退治のために使用されますが、散布後に時間経過した後でも、近くを通りかかった人が、吐き気と下痢を催す、強い農薬です。その他、ネマチュール、ロイズバン、グラモキソン、モキヤップ、フラダン等々を使用している労働者の多くが、手足の湿疹、肝臓障害、目の障害等に苦しんでいます。実際私も、複数の農薬を混合する仕事をしている人の使用した手袋に、

写真を撮るために、ほんの数秒間触れただけで、手に湿疹がでるという経験をしました。

農薬のため病気になるっても殆ど労働者は、経済的理由から病院に行けず、もし会社所有の病院に行けても、体質的アレルギーの診断で片づけられてしまいます。農薬に関する教育も、労働者には殆んどされていません。むしろその逆で、最近特に、農薬に対する消費者の「目」を恐れて、隠す傾向にさえあります。

農薬の入っていた容器は、労働者の目に触れないよう即処分され、中身だけがその名も知らされないまま、労働者に渡されます。容器を焼却する労働者は決まっています。会社側の人間が見ている前で焼却するのです。又、労働者間で、自分の使用している農薬に関する話しをただだけで、クビになる事もあるときいています。何故これ程迄に強い農薬を使用する必要があるのかというと、バナナの形、色、大きさを全て同じ規準にあてはめ、商品価値を高める必要があるからです。

このような状況に対し、責任があるのは、バナナの栽培、販売をする企業だけにあるとは云えません。劣悪な条件の下で、私達に安いバナナを提供している労働者の痛みを知る事なく食べ続ける私達にも問題はあ



ダバオのプランテーションと収穫されたバナナを洗っているところ

るのではないだろうか。

以上、銅製練工場とバナナ栽培に関する諸問題をお話ししましたが、これ以外でも、北ルソンの山岳民族から土地を奪い、繊維会社を設立した、三菱レーヨン、大日本セルロイド、丸紅、鉄の焼結工場に出資している川崎製鉄、フィリピンの人々の蛋白源供給という唱い文句でつくられ、実は私達の食べるエビの養殖場である「東南アジア開発漁業センター」等々、数えきれない程のプロジェクトが「援助」の名の下で「開発」されています。しかし、これらの「援助」「開発」が、フィリピンの人々のためには何の役にも立っていないと云えるのです。



人が、その恩恵を受ける事がなく、何も資源のない私達が、物のあり余る暮らしをしているのです。よその国の資源を利用して、「豊かな」「持てる国」になった日本が、「持てない国」に何かをしてあげる「援助」を見直さなければならぬと思います。そのために私達に何ができるか、と考える時、それは「私達の日常を考え直す事」から始めなければいけないうる理由や、励ましの言葉、その表現のしかたにも、個性があふれている。

一方、彼女達の言葉に、長身を少しかがめるようにして、熱心に聞いている土井さんの表情は厳しい。会場の誰よりも、熱くなっていたはずの

土井さん。その彼女が冷静に見えたのは、「興奮して、参加者の声を一言でも聞きもらすことのないように」と、自分を抑えていたからだろうか。胸がキュンとした。

がんばれ!! 土井たか子さん

「いま始まります女の政治」集會に参加して

中善寺 礼子

十月八日、土井たか子さんを励ます会が、日本教育会館で行われた。土井さんはアジアの女たちの会の会員である。私達も彼女の応援に駆けつけた。

この日、千人入る会場のほとんどが女性でうまった。中学生から私達の大先輩まで、みんな少し上気している。

ひととき大きな拍手に包まれて登場した土井さんは、燃えるような赤いツイードスーツ。冒頭のあいさつでは、会場の声援に感激して早くも涙声：「思いきや、過熱気味の報道陣の一角が椅子から落ちると、あなた、私よりずいぶん若いんだからしつかりしてよね」と笑われる。その表情の豊かさに、まず魅かれた。

応援に駆けつけた作家、詩人、女優、画家そして舞踏家、音楽家、莊々たるメンバーだ。土井さんに期待する理由や、励ましの言葉、その表現のしかたにも、個性があふれている。

女大

開発援助、何が問題か

インドネシアを中心に

村井 吉 敬

援助という名の下になされていることは、援助される側の人々にとっては一体何なのだろうか。さらに、援助というものは、される側だけの問題ではなく、第三世界の自立を助けるという名目で、国民の税金を使っ

になる。このような多額の税金の使い道をもっと監視し、検討する必要があるだろう。

汚職を起す開発援助

これだけ大きな「産業」ともいえるべき援助は業界のようなものを形成している。「援助業界」ともいえる雑誌に『国際開発ジャーナル』という雑誌がある。この雑誌を出している国際開発ジャーナル社は、編集が渡辺美智雄、序文が安倍晋太郎による『国際協力ハンドブック』という援助の解説書を出している。それを見ると、一般に、開発援助計画は外務省、通産省、大蔵省、経済企画庁の四省庁協議で決まるというが、その他多くの省庁も関わりがあり、政府全体で援助に力を入れていることがわかる。しかし、実際には、開発プロジェクトは、日本政府の金を使

い、大抵の場合合私企業が実施している。この本に協賛広告を出している会社には、住友・伊藤忠・丸紅・日商岩井・三菱・三井等の有名商社、

民衆に届かない開発援助

企業にとっては、開発援助とは一種の貿易であり、商売である。しかも、リスクの少ないものである。例えば、ダム建設の場合、日本企業が必要な資材や人員を集め、それに対して日本政府が金を払う。場所が第

三世界というだけで、企業にとっては単なる商売である。ダム建設が現地の住民にどういった結果をもたらすかは通常、これら企業の念頭にはないようだ。援助は始めからよいと決まっているわけではなく、相手国が自立のステップを歩めるかどうかにかかっている。

開発援助は相手国からの要請に基づいて日本政府が認可するシステム（要請主義）であるが、実際には、日本企業がインドネシアなりフィリピンなりの大統領に親しい人に働きかけたり、ときには大統領を動かして、日本側に要請を出させているケースすらある。その結果、大部分の援助は相手国の民衆の利益とは関係なく、日本企業の繁栄のために行なわれることがままある。そして、そのツケは、相手国の借金として残る。特に、建設業界を始めとする構造不況業界は開発援助と称して第三世界に乗り出している。さらに、政治献金と援助の額の関連が言われているが、一兆円の援助の内、どのくらいが政治家へキックバックしているかはよくわからない。両サイドで10%を分け合うというウワサがあるが、これは確証がない。マルコス文書には一五%という数字がでてくる。たとえ五%でも五〇〇億円になる。五〇〇億円が政治献金になっているとしたら

大変なことである。

まやかしただけの

経済協力キャンペーン

現在、外務省を中心にして、官民あがりの援助・ボランティア・アームのようなものがつくり出されている。アフリカ飢饉キャンペーンが行なわれると、同時に、経済協力キャンペーンも行なわれる。五年程前に、西武デパートで、外務省他主催で経済協力展が開かれ、その中で「現在、世界では四億人の人が飢えています」という標語を掲げ、日本国民一人一人が援助に貢献しなければならぬと訴えていた。しかし、実際には、開発援助は、国民の税金を使って、日本の貿易拡大や企業進出のために大企業を支援しているのである。「見

国は貧しいのか、なぜ悲惨な状態になったのかという原因は全く問われない。政府が大量の金を大企業にバラまく援助の仕組みや、具体的に資金と仕事ができるように動いているのかという情報は一切国民には知らされない。

政治戦略に変質した援助

70年代終り頃から、日本の援助は単なる経済成長の手段から、総合安全保障政策に基づき、政治戦略的手段へと変質してきている。アメリカの世界戦略に加担しつつ、最も援助を必要としている国へではなく、国益、「自由主義」陣営を守るためにこそ援助が使われるのだ。ソ連のアフガニスタン侵攻に対してパキスタンへ、ベトナムのカンボジア侵攻に対してタイへというように、紛争周辺国援助といわれる政治的色彩の濃いものがこれである。ODA中、地域別配分は、アジア七割、中近東一割、アフリカ一割、中南米一割と言われ、アジアを重要視している。70年頃にはアジアは九八・三%にも達していたが、ODA総額が増えるなかで、アジアの比率は下がり、現在は七割の線を下回っている。国別順位は、'81年まではインドネシアが数年にわたって一位、'82年は一位が中国、二位がタイ、'83年には一位が中国、二

位がタイ、'84年には一位が中国、二位がマレーシアと変動している。'72年、フィリピンで戒厳令がしかれると、'73年の対フィリピンODA支出は全体の五%から一八%へと飛躍的に増加し、第三位となった。これはマルコス政権に対するテコ入れと見られる。タイでは、七五年のサイゴン解放、七六年のベトナム統一、タイにおける血の粛清で民主派が弾圧されると、'76年以降、タイ向けODAは増加し、ボルボト政権崩壊、中越戦争以降、さらに増加する。'79年のソ連のアフガニスタン侵攻により、'80年、パキスタンへの援助が増加する。対韓国援助は、'80年の光州事件後、前年の三・九%から一気に二二・一%へと増加し、反政府活動を弾圧し、光州事件の影響を乗り切ろうとした全斗煥体制を援助したとしか思えない。'81年、中国では、鄧小平・胡耀邦体制が文革総批判の中で、外資導入路線を確立すると、'82年には、対中国ODAは増加し、第一位となった。

インドネシアの

賠償金と岸信介

日本の援助の原点は、アジア諸国に日本の軍事占領時代に損害をあたえたことに対する賠償金支払いにある。これは、開発援助という形で行なわれたので、日本経済を活性化す

るのに役立った。インドネシア賠償問題はスキヤングラスであり、日本の大型汚職の原点である。本人の意志はどうであれ、構造としては、東日貿易のワイロとしてデビ夫人がスカルノ大統領（当時）に贈られた。実は、それ以前にも、別の女性が別の企業によって贈られていたという。木下商店というクズ鉄業者は、当時の首相岸信介との「満州」時代からの関係を利用し、十隻以上の中古船を二、三倍の高値で政府に売りつけ、それがインドネシアに供与された。そして、岸は木下から「熱海の別荘等」のリベートを受け取ったという。この問題は国会でも取り上げられたが、結局、岸は巧みに逃れた。対インドネシア四億ドル（八〇三億円）になる賠償金は、その後の開発援助の典型となるもので、日本製品を売ることであった。例えば、民衆が決して使っていない四つの大ホテル、日本企業ばかりが入っているの、通称「日本部落」と呼ばれるヌサンタラビルがある。その他、製紙工場、合板工場、綿紡工場等が建てられたが、メンテナンスの不備等で、今はほとんどが廃工となっており。このように、双方の援助担当官たちは、民衆にとって有益か否かという点には全く関心を示さず、当面、もうかるかどうか、そして、業

績を上げること腐心している。

インドネシアの援助の実態

次に、事例を二つあげたい。一番目に、北スマトラのアサハン川におけるアサハン・アルミ・プロジェクトがある。ダム建設により水力発電をし、その電力でアルミ精錬をし、アルミは日本へ輸出するというプロジェクトである。四一・〇億円をかけ、その内七五%が日本政府の資金である。これはもとは民間企業のプロジェクトなのに、援助のカネが使われた。あまりに規模が大きく、企業はそのリスクを負えないと考えたからである。アルミ精錬は多大の電力を消費するため、石油危機以降、コスト高となり、海外に工場立地を求めた。雇用拡大と言うが、建設工事中こそ一万人の雇用を産み出したが、工事完了と共に解雇され、工場に雇われた人は二〇〇〇人程である。ダム建設のために土地を追われた農民は、インドネシア政府により代替地をあたえられたが、ジャングルの真ただ中で居住不可能である。しかも、住民に供給される電力は一〇%にすぎず、さらに、アルミ精錬は公害が予想されるが、環境汚染については何ら調査されていない。以上を考えると、不況業種のアルミ業界に対する援助と言えるだろう。

二番目に、古代遺跡公園計画がある。中部ジャワのポロブドゥール仏教遺跡の修復がユネスコを中心に行なわれ、プランバナン・ヒンドゥー遺跡と合わせて、一大古代遺跡公園にする計画がODAの一環として進められている。インドネシア側では、軍人が会社をつくり推進しており、日本側は、熱心な考古学者の発案という形で進められている。しかし、この考古学者の近親者と見られる人が、このマスタープランを作っているJCCP (Japan City Planning) というコンサルタント会社の役員をしているという。また、公園に指定された地域には、昔から農民が住んでおり、伝統的にヤシの樹液の採液権を得ていた。しかし、ほとんどの農民は何の保障も得ることができず、その土地から強制的に追い出されていった。そして、公園地域には、観光客を受け入れるための施設が整備される。結局、この計画で誰が利益を得たかという点、公園の経営者、日本の賠償で建てられたアンパルクモパレスホテルの経営者等である。これが無償「文化協力」の美名の下に行なわれた内実である。このように、援助は援助の現場から一番近い所から見ないと、現実から遊離してしまう危険性がある。

の要請に基づいて行なうという要請主義があるが、実際に誰が援助を決めるのかというと、日本のコンサルタント会社、商社、メーカー等である。彼らは「現地人にはプロジェクトを見つけ、立案する能力がない」と言っており、日本では売れないが、第三世界の国々ならば売れる製品を売りつけている。しかし、これは考え違いであり、相手国の民衆こそが何が必要であるかを知っている。例えば、農民に何が必要かをきくと、猪を防ぐ金網等、日常生活のレベルで足りないものをあげるが、このような百万円以下の少額のもの、開発援助の対象には始めからならないシステムになっている。しかし、スリランカやフィリピンで建てた、最新設備の整った大病院が医者不足や高料金で、現地の民衆には全く役に立っていないというように、大規模プロジェクト主義は援助をゆがめる原因である。

私たちの役割

それでは、企業の代わりに私たちは援助ができるのかと言うと、それはできないし、援助を全くやめてしまえとも言えない。日本株式会社メリットになつて援助を彼らにやめるはずもない。相手国の民衆にとって、より害の少ない、あるいは有益な援助をさせるように、政府に働きかける民間の運動が必要とされている。民衆が本心に何を必要としているかを顔と顔を合わせて、民間ベースで調査し、政府の金を民間（日本のボランティア団体）を必ずしもささない）が使って、小回りのきく援助に変えていかなければならない。しかし、日本には、このようなきめの細かい援助の提言ができ、実施できる民間団体はほとんど存在しない。政府から金を得て援助を行なう民間団体には、OISCAという新興宗教を母体にした日本古来の農本主義・天皇主義の団体もある。ボランティア、NGOならよいとはいえない。十分に警戒してみなければならぬ。西独・北欧等では、援助の専門家を養成し、民間の直接の交流を通して援助の提言をする民間団体があり、活躍しているという。日本では、戦後四〇年の間に、すべてを企業・役人にまかせる「会社官僚社会システム」ができあがってしまったが、これに風穴を開けない限りは援助の質を変えられない。しかし、絶望に陥らず、敗けながらもやっていく視点が必要である。我々自身の目と耳で確かめることから始め、小さな団体の輪をつなげ、広げていかなければならない。

（まとめ・大木和子）

女大学

開発教育とは何か

甲斐田万智子

開発教育とは何か

日本で開発教育という言葉が公式の場初めて使われたのは、一九七〇年代後半で欧米より約一〇年後れて始まりました。開発教育はさまざまな定義がなされていますが、共通して出されるポイントは次の三つです。

- 一、第三世界の現状のみならず貧困、飢餓などの原因を知る
- 二、国内の問題にも目を向ける
- 三、意識変革、行動を起こすことを目的にする

日本で開発教育を進める意義

ここ数年のアフリカ飢饉救援チームによって、アフリカの人々は誰もが飢えていて無気力に食糧をただ待っているというような偏見が生まれました。また、アフリカと比べ、このように経済的に豊かな日本に生まれて良かったという意識が子供たちについてつけられました。一方で公害の輸出、有害商品の輸出、資源の乱開発、軍事化へ加担などを行い、第三世界の犠牲のもとに私達の豊かさ

があるということは伝えられないまま、救援活動の盛り上がりからの結果、日本人はアフリカを助けてあげてい

るという傲慢な態度が生まれてい

ます。第三世界で日本のために苦しんでいる人々の声を伝え、私達のあり方を問いただすべく、アフリカやアジアの人々に対する偏見や蔑視を正していくことが開発教育の役割です。また、国内の市民運動によって有害なものに反対すると、それらはみな第三世界へ持っていかれてしまうという結果が生まれています。こうした自分達さえよければという狭い視点を改めていくことも開発教育の役割です。

私の考える開発教育は、レジメにその全体像を示しましたが、各分野のネットワークをつなげて、世界の不平等・不公正な構造を変革していくことを目的としています。そしてさらにその過程において、ひとりひとりが人間らしく生きること・あらゆる抑圧から解放されることが開発教育だと思っています。そのためには、第三世界の人々が解放されることは、自分達の解放につながるという

うことを自覚することが大切でしょう。パウロ・フレイレはFear of Freedomという言葉を使っていますが、現代人は子供から大人までひとつのレールをたどらず歩くことを強いられていて、まわりの人と違う行動をとることに対して大きな不安を覚えます。自分を縛る多くのしがらみから意識して自分を解放すれば、その不安から逃れて自由に行動を起こすことができるようになるのではないのでしょうか。

北が南を搾取する構造的暴力に組まない勇気というのも、そこから生まれてくるのではないかと思います。楠原彰先生が「アフリカの子供を飢えから救うのも、日本の子供を自殺から救うのも、現代の若者から「Fear of Freedom」から救うのも同じ線上にある」とおっしゃっています。開発教育はこのような捉え方で進めていくべきものだと思います。

開発教育の実践例

国内での動き

一九七九年に初の開発教育のシンポジウムが横浜で行われ、その後大阪、名古屋と二年続けて行われました。一九八二年末には開発教育協議会が発足し、機関誌「開発教育」の発行、年に一度の開発教育全国研究集会の開催、開発教育に関する情報

収集を行っています。この同時にDESA (Development Education Study for Action) という若手のグループも生まれ、月一回の学習会のほか、開発教育のワークショップ(連続講座)やゲーム&フィルムの集いなどを行ってききました。昨年は開発教育についての論文をまとめた文献集を出しています。

開発教育の実践の場として考えられるのは、学校教育と社会教育、そして市民運動の場です。日本では、あまり市民運動の場における開発教育が重視されていませんが、その点に關してもっとヨーロッパを見習うべきではないでしょうか。

開発教育全国研究集会では、例年学校教育と学校外教育に分けて実践報告が行われています。昨年の集会では、学校外教育における実践報告として、アジア保健研修所において行われた無言劇が紹介されています。バナナの問題や日本のせいでは食べられなくなったアジアの人々のようすをアジアからきている研修生と共に演じたという報告でした。その他には横浜YMCAの国際理解講座や、中部リサイクル活動の実践報告がありました。これらの実践が機関誌「開発教育」に掲載されています。開発教育の教材としては神奈川県川県の国際交流課が出版している、た

みちゃんと南の人びと』『たみちゃんの80日間世界一周』という冊子が代表的なものといえるでしょう。たみちゃんという架空の人物を通して南北問題や第三世界の問題を見近に感じることができると評判がよいようです。

国内の動きで気になるのは、外務省も開発教育を進めようとしていることです。これは問題点の多い政府開発援助(ODA)をこのままどんどん増やしていくことに対して、国民の支持を得ようとするものです。私達が進めている開発教育では、むしろ今のようなODAはやらない方がいいと言っているわけですが、この外務省が進めようとしている開発教育にすり変えられてしまわないように気をつけなければなりません。

ユニセフでの実践

●キャンペーン資料(募金を呼びかけるチラシ類)——以前は第三世界の悲惨な現状を伝えるものが中心でしたが、最近では現地で地元の人々がいかにか自立へ向けての自助努力を行っているかを具体的に示し、それに對しどんな協力が真に必要なかを解説しています。

●ユニセフライブラリー(視聴覚教材)——悲惨なフィルムや写真パネ

ルを求める人々に対し、それらが持つ弊害を説明し、自助努力のようすがわかるものを勧めています。

●『なぜ南は飢えるのか』——飢えの構造をわかりやすく解説し、日本人の食生活とどんな関わりがあるのかを示したのですが、イラストをふんだんに使った読みやすさのため好評で五万部ほど出ています。とくにたくさんの中学生在が、これを読んで初めて自分達とこんなに関係が深いことを知り、何かしなければと思った」という感想を寄せてくれています。

●『ぼくたちはこうやった』ユニセフ活動実践例集一九八五——各学校での開発教育の実践例集ともいえるもので、アフリカ飢饉救援チームが盛り上がった一九八四年に、ただ募金をするのではなく、その前後に学習をし、学校や地域に伝える活動をする中で意識が変わった子供たちの例を集めました。(今年も昨年の実践例を集めて第二集を発行しました)。

今後の課題

私達一人一人に何が出来るか

一、もつと行動を

レジメの図に示したように各分野をつなぐネットワークをつくること

変えていくためには今後もつと行動を起こしていくことが必要だと思

います。まず、第三世界の公害を輸出したり、有害商品を売りつけている企業に対して、公開質問状を送ったり、商品のボイコットをしたりして世論をつくっていくことが考えられます。政府に対しては、ODAの問題を追求したり、第三世界における企業活動を規制することを要求することが出来るでしょう。また、マスコミに対しては、第三世界を正確に伝える、あるいはその良さを伝える報道をすることを要求したり、やらせなど第三世界の人々の気持ちを無視した取材のやり方に抗議することが必要です。そして、開発教育が人間解放をめざすなら、今の管理教育に對し、文部省や教育委員会に抗議していくべきでしょう。

二、体を使って心から変えられる体験を

知る、伝える活動は初めのステップとして大切ですが、頭だけの理解で終わっているのは、その後の活動が続きにくいことが多いのではないかと思います。第三世界の人々の気持ちになってみるということはなかなか難しいことですが、だからこそ劇や歌、詩などを通じて人々の怒りや悲しみ、喜びを心で感じていくことが必要ではないでしょうか。また、行動を起こすための勇気も、自分にかけるのか、自分は何をしたいのかを発見するワークショップによって生まれてくるのではないかと思います。



女大学

オランダ、イギリスの市民による海外協力活動を見て

小泉順子

一九八五年十月、私は外務省の外

を乗り継いで旅をしていた。今回の旅行は四人でアメリカ、カナダ、ノルウェー、ベルギー、西ドイツ、スイス、オランダ、イギリスを分担し

て開発協力、教育にたずさわる地域レベルのグループの活動を調査するのが目的であった。

欧米の市民による開発協力、教育活動は日本に比べて歴史も長い上に質も高く、活発だと言われる。今回訪れたオランダ、イギリスにも三〇年、四〇年の歴史を持ち、百人を単位とする人が動く大きな組織が存在する。しかしこうした団体の活動は、私たち自身の長期的活動を展望する参考にはなるが単に感心していても仕方がない。そこで今回は地域レベルの小さなグループに焦点を当ててまわったのである。そして実際、資金、人材といった私たちと共通の課題を抱えつつもそれを乗り越えようとする彼らの姿には、背景は異なりながらも学ぶところは多かったように思う。

▼オランダ

オランダはスカンジナビア諸国と並び、開発協力、教育の分野では政府も民間も『進んでいる』国と評される。「第三世界に関する情報を人に流し、第三世界に連帯する」という政治的な目的を持ったグループは一九五〇年代半ばに始まりその数も多い。全国型の団体の代表としてNOVIB（オランダ国際協力機構）とでも訳せようか、IKVOS、そ

して第三世界ショップ連盟があり、その他多国籍企業の活動を調査し告発するグループ、国別の連帯委員会、開発教育センターなど、バラエティと数に圧倒されてしまう程だ。

開発教育センター（略してCOS。オランダ語では開発協力センターであるが、活動内容は開発教育）

一九六〇年代終り頃よりオランダ各地に開発教育センターが作られ始め、今では二〇を超える。設立の目的は第三世界に対する人々の認識を深めること、また地域で活動するグループのコーディネートである。最近是人々の関心を高めるため次第に地域色を濃くしている。例えば南部の都市チルブルグのCOSは町の主要産業である繊維産業の衰退、第三世界への工場輸出、失業という問題を切り口に労働組合の人々と第三世界を考えていく。またアインントホーヘンのCOSは町で働く北アフリカやトルコからの移民問題と、町に本社のある多国籍企業フィリップスの企業活動を糸口に第三世界との連帯の道を探っている。第三世界と自分や地域との接点を見つけてテーマを具体的に設定することの大切さを強調し、人々の間に積極的な足を運び、対話を重ねる中で相手の認識を深めるといった点は徹底していたように思

う。

「近年は経済状況が悪く、人々は暗いことに関心を示さなくなっている。第三世界に何か送るとか、解放の日のお祝いをするとか、具体的な活動が中心になりつつある」とあるセンターのスタッフは語っていた。

第三世界ショップ

オランダの第三世界ショップは搾取されない形で第三世界の生産品を売る拠点というより、貧困の構造的な原因と闘うための情報と行動のセンターである。UNCTADで一次産品の価格低落が問題化したのを受けて関心ある人々の手で一九六九年にショップの第一号が誕生して以来、砂糖きびキャンペーン、ベトナム反戦、チリへの連帯など他のグループとも協力して運動を展開してきた。ショップ数は現在、二〇〇に登る。

私が訪問したときはニカラグア連帯委員会やNOVIBと協力して経済封鎖に苦しむニカラグアからバナナを輸入して売るキャンペーンの真最中。国連から草の根レベルの情報をきちんと受け、ホットな問題にうまく乗りながら具体的な活動を通して連帯をアピールする手腕には、本当に感心した。

こうした活動は無報酬でかわる

うコミュニティ・リンクが中心だ。

そしてWISER・LINK（訳せば女性の自己教育と人材の国際リンク）は、イギリスの女性及び第三世界の女性の情報を通したリンクである。一九八三年に一人のフルタイム・スタッフを得てスタートしたリンクは、現在女性解放に関心を持つ活動するイギリス内外の約五、六百の個人、団体と接触を持ち、ニュース・レターを通して情報交換をしている。彼女たちのニュース・レターには第三世界やイギリスで闘う女性たちの活動の紹介、イベントの案内、書評が満載、年次レポートにはリンクのメンバーの横顔が紹介されている。また他の女性グループと共同のイベント開催、異なる分野のグループの集会へのメンバー派遣をするなど同時に、彼らの活動報告も行なう。彼女たちが今力を入れているのは、ロンドンに『女性の国際人材センタ

学生や主婦、失業者の手によって支えられている。ショップとはいえ家の台所を使ったり、籠を抱えて行商したりで、売る物も第三世界に関する書籍、一次産品、手工芸品などどれを中心にするかは全て売る人の主体性に任されているにすぎない。

一九七四年、こうしたショップのコーディネートシヨンのために「連盟」が設立された。フィールドワーカーを抱え、ショップの設立運営の方法を人々にアドバイスする他、マニュアルも作っている。また劇やイベントにも積極的に取り組みたいと連盟の女性スタッフは意欲を燃やしていた。

▼イギリス

イギリスの開発協力といえばOXFAM。四〇年の歴史を誇り、国内に七百以上のリサイクルショップを持つ大組織である。その他、教会を基盤とするCAFODやクリスチアン・エイドなどがあり、これらの人材、資金、情報に支えられる形で地域レベルの小さなグループが多数存在する。全国に約四〇の開発教育センターがあるほか国、民族別の連帯委員会は六〇を越え、人権と開発、反人種差別、女性等の分野で活動するグループも多い。政府の資金が少なからず出ているオランダに比べ、

こちらはどこでもお金がなく人材不足など余裕のなさが感じられたが、反面一つ一つの団体が様々な工夫を凝らした活動をしており、バラエティに富んだおもしろさがあった。

開発教育センター

イギリスの開発教育センターは地域によって教師を対象にした学習材開発をする所あり、キャンペーンや第三世界に対する資金援助を行なう所あり、一つ一つ違った顔を持っている。それぞれが、センターにかかわる人と囲む地域の人々の関心の接点を求めた結果だろう。

その中でSEAD（開発のためのスコットランドの教育と行動）はキャンペーン、資金協力、調査、研究、社会教育活動を展開する唯一のセンターだ。テーマはスコットランドとアバルトヘイトの関係、スコットランドの多国籍企業とインドとのかわりなど、スコットランドという地域にこだわった形は多くの人の支持を得ている。調査結果は必ず他人が実績として評価できる本や冊子にして積み重ねる。（オランダでもイギリスでも人々に第三世界のことを知らせる材料が豊富だ。しかもまじめな内容だけでなくゲームを作ったり、どうやって普通の人と話すかといったマニュアルのたぐいも多い）セミ

WISER LINK

リンクととかトウニングということばが八〇年代に入ってからヨーロッパ各国で使われるようになってきている。地域や地域の中のグループと何らかの形でつながることを指す。イギリスでは特に両地域の学校、病院、図書館などがつながりを持ち合



オックスファムの店(イギリス)

ー」を設立することだ。女性たちの出会いの場を作るとともに、資料センターを持ち、各国の女性たちとの情報交換を進める核となることを目指している。資金はOXFAM、クリスチャン・エイド、CAFOD、EECなどが出しつつある。

オランダでもイギリスでも開発を語り、行動する人々の中で『女性』というのはいつの中心の問題だった。オランダではどの団体にもごくあたりまえに女性スタッフがいて女の問題を追っていたし、イギリスでも女性たちがネットワークを作って活動していた。

そして私はこの旅でずいぶん元氣になって帰って来たように思う。しかもやりたいことをたくさん抱えて、アジアの女性たちの会の活動にこの経験が少しでも役に立てば、と真剣に考えているところである。

女大学

内発的発展の担い手としてのおんな

鶴見 和子

内発的発展とは

私は内発的発展ということばをずっとみてきたけれど、それは近代化というものの対する疑問からきています。経済成長すればよい、GNPが大きくなりさえすればよいということに対する疑問です。

最初に近代化した国はイギリスで、つぎにアメリカ、フランスなど西欧諸国ですね。その他の、非西欧諸国、日本とか中国とか、その他のアジア諸国とか、アフリカとかラテンアメリカ諸国は後でやってきた。だからもうすでに西欧諸国がつくったお手本をもらいうけてやるんだから、これは内発的発展ではないというんです。それを私は大変疑問に思っています。というのは、日本だって中国だって、タイだって、インドネシアだって、それぞれの国の歴史があるし伝統があるし、そして、自然生態系がある。これらの条件にもっとも適合した形で、生活を豊かにしていく必要がある。それぞれの国の人々が異なる伝統、異なる歴史、異なる自

然生態系の中で、自分たちが考えていく。そういう意味では非西欧社会でも内発的発展者ではないか。それが模倣だけで工業化すると、その社会の中で様々なひずみがおこる。小さい人たちが自分たちにもっとも適合したやり方を創造しながらやっていく、そういうことでないと困るんじゃないかということ、私は内発的発展ということを考えてきたわけ

近代化と内発的発展はどちらがうか

そこで、近代化論と内発的発展論とがどちらがうかといいますと、第一に先発西欧諸国だけが、内発的なのではない、すべての社会が、多かれ少なかれ、内発的になるのがあたりまえなのだといいことです。それからもう一つは変革の主体形成に重きをおく、ということなんです。

私は、水俣にいて人間が自然の一部であることを、深く教えられたんです。環境が破壊されただけでは、人間は体で何かという、自

然なんです。肉体というのは自然なんです。これを私は内なる自然と考えているんです。

中国とかインドとかペルシャとかの古代文明だけでなく全ての社会では文化をもっているわけですね。ことばからはじまって、ものの作り方、感じ方、考え方をもっているということなんです。だから、内発的発展はエリートではない普通の人や農民だとか、農民だとか労働者だとか、それから私たち、女、子ども、の知恵だとか、ものの考え方とか感じ方を重くみるということなんです。

それから、地域を中心に考えるということなんです。近代化論では、全体社会単位と考えています。しかし内発的発展というのは、国家全体として考えるよりも、もっと小さい地域、例えば不知火海岸をひとつの地域として、あるいはそのなかの特に水俣とか、そういうふうになりあいて小さい範囲で考えます。

内発的発展は、社会の格差を

少くする方向

小さい考え方であるということに

「助ける」ということの3つの面

もう一つ申し上げておきたいことは、タイ、インドネシア、フィリピンや特に韓国の人たちと話していて経験があると思うんですが、「あなたたちは、そういうことをして我々を助けようとしているけれど、我々は我々自身で助けます。だからあなたが日本人としてなくてはならないことは、あなたの国の政府の政策を、そうしないようにすることです。これはすごく痛いことなんです。私は国際関係の問題で三つあると思うんです。一つは「助ける」、相手が自立できるように助ける、ということですね。外へ出ていって、自分の国以外のところで何かをやることです。そのほうがやさしい場合があります。どうしたら、自分たちの政府や企業が、国内でやっていることを変えさせるか、そのほうが難しい場合がありますね。自分がほんとうにぶつかっていかなくならないですから、内発的発展ということを考える場合にも、日本国のなかで、工業化による弊害、その非常に大きいものは戦争ですが、私は戦争と公害は区別しておりません。公害の最も大きいものが、戦争だと考えています。日本の国のなかで、小さい人たちが

いっしょになって、自分たちの力で

戦争をしないように、公害を出さないようにしていくことが一つの内発的発展だと思っています。そうすることを通して、国の政策を変えさせることができれば、それがまた、外国に公害をもっていくとか、戦争をししかけるとか、そういうことをさせなくする歯止めになりうるだろうということなんです。

それからもう一つは、日本の国内で内発的な発展をやっている人たちが国をこえて、地域と地域とが結び合う、ということなんです。日本の企業によつて公害を受けている人たちとどうやって連帯してお互いに助け合おうかということも大切なことです。

なぜ、「女」なのか

つぎになぜ「女」ということをいわずにはならないですね。私は自分が女だけれど、女について語ることはあんまり好きじゃないんですけど、今日はどうしても、なぜ「女」というのかということについておかなければいけないと思うんです。

「ヘルメス」の一九八五年春号になくなられた玉野井芳郎先生の「女そして男の世界」という題のエッセーがあります。玉野井先生は地域主義を提唱されました。はじめは、抽象的に「地域」を定義していらしたんですが、最後に到達された「地域」というのは、

こういうことなんです

「……その生活者たちは、地域における土と水からなる日常性の生態的生活環境の中で、生命を守っているのではないでしようか。ここまできたときには、はじめて人間存在の根源的類型に行き当ることになります。それは、女または男という、いわゆるジェンダーの問題です。」

「私は冒頭に、地域という等身大の生活世界の中で土地とそれを介して生命が育つということを強調しておきました。まさしくその論理の上に生命を育てる世界が女に特有な世界としてあるということに思いをいたさざるをえないのです。」

「……子どもを産む＝生むということ、生命を自分のからだの内部で育てること、こうした女性の視点こそは、絶対に男性のうかがい知ることのできない人間の世界ではないかと考えられるのです。……」

この女のもっている感覚というのをだいにしましょう。そして男もいっしょに考えられるようにしましょう。そうして共通の立場に立ちましょ。それが地域であるというふうに

は利点と欠点がございます。それを最後に考えてみたいと思います。

現在ある一つの社会のなかの格差、これは所得格差もありますし、名声の格差もありますし、権力の格差もあります。ことに女は、いかなる社会においても、先発国であろうと、後発国であろうと、差別を多かれ少かれ受けております。内発的発展というのは、差別、格差を少くする方向に動くということなんです。

戦争、飢餓、差別、環境破壊、搾取とかその他さまざまな形で日常的に私たちが腹をたてていることはたくさんあります。それらをひっきりめて「構造的暴力」とよばれます。えらい人が大声で叫ぶと無理なことでも通るといふのは、これも構造的暴力の一つですね。そういうことに私たちはたえられない。私たちはそういう仕組みに加担したくないと思っています。

相手を黙らせるためにかつて一九三〇年代には、軍人が議会で代議士に対して、「黙れ！」とやったわけですね。あれも、構造的暴力の一部です。今でも国会で構造的暴力が発生することがあります。あらゆる日常生活の中にある暴力を少しづつなくすということ、私たちは心がけたいと思います。

意味での地域を内発的発展の原点におきたいと思っています。

内発的発展の事例

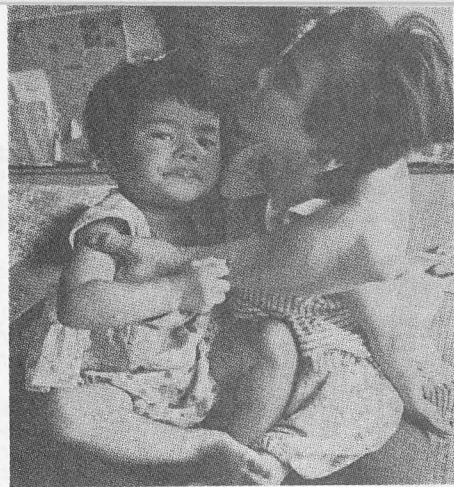
時間の許す限り事例を申し述べたいと思います。

まず事例1、近代のはじめに、社会運動は、女によって始められたという事例です。2番目は戦争の体験で、3番目は、水俣の例をお話ししたいと思っています。

事例一——米騒動

第一は「米騒動」です。富山の米騒動は一九一八年七月にはじまりました。私はちょうど一九一八年六月に生まれましたので「米騒動」というのは私にとっては非常に大事な事件なんです。米騒動は日本の近代史上最大の民衆蜂起です。これが女の非暴力運動としてはじまったということが大事です。そして、結局軍閥内閣を倒して日本ではじめての政党内閣を出現させるきっかけになりました。

なぜこういうことが起こったかという、お米が足りなくなってお米の値段が非常に高くなった。それで、富山県の漁師町の主婦たちが、困った困ったといって井戸端会議を開いたわけです。「米をよそへやるから



子供は2人とも胎児性水俣病

高くなるだらうや。じょうき(蒸汽)に米を積ませんようにせんまいけ」魚津の港からどんどんお米を積み出すのがいけないんだから、それを出さないようにしなきゃいけない、ということが序曲になって、翌日すぐに実行に移すんですね。北海道へ米を移出させるために沖合に来ていた汽船に米を積ませないようお願いをするんです。お願いするために四六人の主婦たちが海岸に集まった。それをいち早く察知した警官の説諭で主婦たちは一応帰ったんですね。それからがもう大変なんです。米の移出反対、米の安売りの嘆願運動がだんだんに飛び火していくきっかけをつくったんです。七月二二日に始まりまして、十月四日まで続いております。記録によりますと、富山県で

の発生件数は三〇件、参加人員が五千四百四十二人で、そのうち女だけの参加つていうのが二千八人近いんです男だけつていうのが六七〇人でずつと少いんです。混合というのが二千五百人程度ですね。女のほうがたくさん参加したということなんです。

そこで女たちの運動がどういう形をとつたかということなんです、それはもつぱら懇願です。

女がなぜ「米騒動」をしたかっていうと飢餓の問題ですね。男が外に出嫁ぎにいっているとき女は自分が食べなくても、子どもに食べさせなきゃならない。そういう生命の問題がかかっていたと思うんですね。それと女の運動が非暴力の伝統をもつていた。これは私は記憶していいことではないかと思ひます。

まったくですね。それはね、不特定多数を感動させるのとは全然ちがう、目の前にいるその子どもの魂をつくるという作業として、書いたんですね。彼女は、書くことを通して、戦いがいちど始まってしまったら、自分の子どもも自分では守れないことがよくわかったといったんですね。ですが母親たちの戦争体験のなかには私たちは加害者だったということがひとつもでてこなかったんです。そのことが、私たちがやっていった母の戦争体験では非常に欠けていたと思うんです。最近の戦争体験の記録には、加害者体験がはつきりでますね。そしてそれは、女の体験というより男の体験のなかから出てきます。

創価学会の反戦青年委員会と反戦婦人委員会が、百冊以上の戦争の記

況になつたらみんなそういうことをする、どんないい人でも——いい人の方が逆にやるかもしれないですねニコニコして順応する人のことをいうんでしょ（笑）。だから私はいい人のほうがやるかもしれないと思いますけれどね。「一度起こつたら、もうザザザ」といふ、だから起こらない様にするにはどうしたらよいか」ということをその青年たちが言っているんですね。「考えてみたら、そういうことを命令した人、やった人たちが現在も政府を動かしているのではないか」つて書いてあるんです。私あつぱれだと思っています。

だからね、戦争体験を子どもたちが継承しないなんていうのはウソです。継承してくれるように話すとい

事例二——戦争体験

その次は戦争体験のことなんです
が、私は生活記録運動を、一九五一
年から始めたんです。そのときみな
ながいばん心にかかっているのは
戦争体験の問題でした。

中小企業のオカミさんが自分の競争体験を毎晩子どもに話しては書き話しては書きというかたちでね、書き始めたのね。そしてら子どもがもう少し早いというわけです。そうしてとうとう子どもにつられて書いてし

んですが、これはものすごいものです。青年たちが戦争にいった人の話を聞きしてるんです。南京虐殺に参加した人、三光を実際にやった人に語らせているんです。残虐行為の話をしたあとで、旧兵士のその人が最後にこういつてるんですよ「もしまたあれと同じ状況になったら、自分と同じことをするだろう」と。編集をした青年たちが最後に座談会をやっています。結局、「戦争という状

事例三——水俣の杉本栄子さん

次に水俣のことに移りたいと思います。杉本英子さんのお話をします。彼女はすごい女性です。お父さんから漁師の技を教えたおまじなつれあいも漁師です。男の子が五人いて、みんなすばらしい子どもたち

ちです。彼女は激症型水俣病でした。ほんとにのたうちまわって苦しんで、いるその病人が今は漁にいつてゐるんですよ。どういうふうにしてそうなつたかという長い長い話なんです全部はお話しできませんけれど、最近のことだけを二つ申し上げます。

一つは、この人は体がきかないんだけれど、子どもの頃踊りをやっていたので、もう一度リハビリテーションとして踊りをやりたいと思ったんですね。這うような人がどうして

——船魂さまって皆さん知ってる？
 なんて鳴くかわかる？　チチチチチ
 って鳴くんですって。——船に魂たま入れ
 をする、それで船魂さまがチチチチ
 ちって鳴くと大漁なんです。それが
 わかるのは彼女一人なんです。鳴い
 てるなってわかつて「踊り教えて
 よ」っていわれると、教えなきやい
 けない。夫は漁師だからわかるん
 です。きょうの風の向きで、ああい
 なーとかね、子どももわかるん
 ですね、遠慮して黙ってる。

で漁をやって生きていく」という話をしてくれたんですね。

そしてこの栄子さんはね、同じ水俣病の釜家かまけのお嫁さんを一年半も自分の家で世話をしてたんです。杉本さんは甘夏も作ってます。農薬をいっさい使わないやり方ですね。

最後に石牟礼さんが栄子さんについて書いていることを紹介します。

「そしてわたしは、『茂道の栄子さんから、しばしばあの秘蹟を授けられる。

踊りをやったのかわからないけれど、夫の方がいくらか体がきくんですね。夫といっしょにお稽古にいくんですね。これがまたいい旦那でね、女なみですよ(笑)、この人は。一諸にお稽古にいったね旦那の方が先に覚えちゃうんですね。で帰ってきて、栄子さんに教えてあげるのよ。そうやって栄子さんは名取になったんですよ。ね。とっても上手なんです。私拝見したんですけれど、朝這ってた人がね、すばらしい踊りを踊るんですね。そ

なせ「ほら、榮子行こう」っていいてくれなかつたのか。この人はすごい我がままなんです。こんなすばらしい夫や子どもに対して不信になつちやつて、泥湯という温泉にいつちやうんです。そして泥湯につかつていたらね、チチチチチつて船魂さまが鳴いたつて、「これは大変だ」。それで家へとんで帰つて、夫にね、「船魂さんが鳴いたからいこう」つて言たらね、その夫がまたいい夫ね、「ハイハイ」つていいつてね(笑)、船子

パンと聖水に相当するものは、魚と塩である。地の胎に生じた潮、その潮に生じた魚とをよく授かる。茂道の人びとと共に。彼女は復活への禱りを仏前で唱えもするが、もつと日常のさりげない時に、親愛をこめた冗談で禱ってくれる。茂道の人びとが彼女のエロスと一緒にような冗談にふかく心を傾けている様子を見れば、彼女自身が、甦つた人であることをよく知っているからと思われる。

人間と自然との一体をうたつて

そうすると漁に出たいんだけど出られなくなっちゃう。それであるとき人間不信に陥ってしまったんです。

それからブツリ踊りをやめたんです。「私はやっぱり海に戻る。海にいったら鳥が、栄子さんよく帰ってきて

今朝、偶然ですけれど、石牟礼道子さんの句集「天」が届きました。その中で一句ご紹介します。

値へのコミットメントというところでの連帯を通して深く結ばれるのではないかと思います。

船魂さまが鳴く

話をしをする。海とお話しをする。漁師として生まれたんだから、この海

86アジアの女たちの会の合宿は、一泊二日という短時間ながらも「熱く」行なわれた。まず、ペナンで開かれた森林資源危機地域会議に参加した松井やよりさんからホットな情報を頂いたが、その会議では、日本の森林伐採行為がアジアの環境破壊のみならず地元民の伝統的生活や部族の存続までも脅かしている現実が、欧米・豪州の各NGOから鋭く指摘され、非難は日本に集中したという。日本の政府や企業の行為が経済中心

に援助が確実に届く事や、枠内に女性のニーズを組み入れ援助全体を女性の状況向上にむけたものにする事等が目的とされている。SIDA (Swedish International Development Authority) は、NGOへの資金援助も盛んで、自国のみならず、第三世界のNGOをも支援している。スウェーデンでは市民の意識も高く、NGO活動も草の根的で幅広い。歴史的にみても早くから国際社会への貢献の重要さが認識されており、日

彫りにされた。続いて「これでいいのか日本の援助市民キャンペーンの会」に当会から参加した竹井さんからの報告、タイに何度か訪れている手塚さんから、タイの農村の状況についての話があり、機械化が農民を一層貧しくしている現状を知らされた。又、伊従さんからフィリピンにおける日本の存在や日本への出稼ぎ女性についての話をいただいた。これらの厳しい現状に直面し、会場のそこそこから深いため息がもれたが、そうもしていられないので「私達に何が出来るか」を討論した。様々な意見が出され、各々考えさせられる事も多かったに違いない。結局、アジアの人々を苦しめている原因を我々の「生活」の中から排除していく、我々の「生活」のあり方を見直す事から始めよう、という事になった。魚・紅茶・ヤシ油等我々が日常触れている物がアジアの問題とどう結びついているのか、調査し発表していく事になった。又、「開発と女性」「買春観光」のテーマも、ひき続き追う事にした。来年の十周年記念イベントで何をやるか、思いつくまにイメージを出し合い、この段階では全くとりとめも無いものであるが、シンポジウム、演劇、写真展、アジアの料理紹介、リサイクルショップ等々、自由な発想を交わし合っ



た。今後、実際に運営し、イベントを成功させるまでには様々な「産みの苦しみや喜び」があるに違いない。十周年記念イベントは単なるお祭りではなく、日本に「何となく」暮らす人々に、同じアジアの人々の生活の苦しみや喜びが、私達一人ひとりのあり方を変える事によって、少しずつ減らす事ができるのだ、そしてそれは、さほど難しい事でも、大それた事でもないのだ、と感じてもらおう為のもの、我々がかける迷惑を最少限に押さえる為のものである。そんな成果をはっきりイメージする限り、イベントまでのどの様な大儀も乗り越えられる、そんな事を感じさせる今回の合宿であった。

暑い夏の 熱い女たちの合宿報告

浅野 真貴

主義に偏り過ぎ、国際的、生態的視野に欠けているのみならず、市民の意識も低すぎ、欧米のNGOの様な活発な反対運動がなされていない事も大きな反省点であると結ばれ、続いて、では西欧のNGOではどの様な活動がなされているのかを知る為に、スウェーデンとノルウェーの開発援助や女性に関する資料が紹介された。スウェーデン議会の要請で11の女性団体がつくった開発問題女性評議会の協力でSIDA編「開発援助と女性行動計画」は、最貧層の女性

本とは全く異なる基盤をもっている。「ノルウェーの国際的努力ー女性の地位向上に向けて」と題するレポートでは、男女差別をなくす為、国際協力プロジェクトに必ず女性に関するものを設ける事を義務づける、又外務省や国際機関での雇用数を必ず男女同数にし、男女の声を等しく反映させる事が推奨されている。実際、ノルウェーでは女性の総理大臣をはじめ、内閣の閣僚の中にも八人の女性がいる。女性問題、開発援助ともに「途上国」である日本の姿が浮き

予定期日は一九八七年十一月二十一日(土)、二十二日(日)、二十三日(月・祭日)の三日間通しテーマは現在討論中です。三日間に盛りこむ企画として上がっているのは、千人規模の集会・シンポジウム(アジアから女性を数人呼ぶ)音楽、パフォーマンス、映画等の舞台構成。参加者一同が合宿しながらの分科会、徹底討議。パーティー、ツアーなど。

柔らかい感性としなやかなからだ、十周年に向けて創造的にとり組んでいきたいと思っています。企画、資金集めについてのアイデアをどんどん持ち寄ってください。アジアの女たちの会の次なる出発を、一緒に創り上げていこうではありませんか！

ひろば

お知らせ

十周年記念イベントに向けて

草野 いづみ

※アジア・女通信へうれしく拝見。

僻地において広く日本からアジアまでの情報を得ることができて喜んでいきます。今夜は「土井たか子さんとともに」の催しが日本教育会館で開かれていたようで、五島さんもさぞかしお忙しいことだろうとお察しいています。でも天下大乱の時こそ、女の底力を示すチャンスが来たのだでしょう。皆さんのお手伝いが充分にできませんが、精一杯の協力はさせていただきますので、よろしく。

(山口 H・G)

こんにちは！先日の伊豆伊東での合宿の興奮さめやらぬま、ペンをとっています。合宿での熱気、新会員の方々の息吹を感じ「動いている」会を感じ、大変嬉しく帰途につきました。さて、松井さんがヨーロッパ、アジアよりもちがった資料の翻訳をお手伝いしたいと考えています。できれば、アジアの現状を細かく知れるような内容がほしいのですが……教員ですの、冬、春休みが有効に使えます。ご考慮いただければ幸いです。地方会員ゆえお手伝いが限られ、残念です。皆さん元氣活躍されますよう。(静岡・M)

活動報告

(1985年10月～1986年10月)

- 85～86 女大学「開発と女性」暮
10・16 女大学「タイの農村の暮らしとタイ・ワンゲル」ス
11・20 女大学「市民の海外協力実践から」大橋正明
12・18 女大学「女性の立場で開発を考える」松井やより
1・22 女大学「開発援助、何が問題かーインドネシアを中心に」村井吉敬
2・26 女大学「マレーシアの女性一経済開発の中で」中原道子
3・19 女大学「韓国の経済成長と女性の地位」矢野百合子
4・16 女大学「開発教育とは何か」甲斐田万智子 小泉順子
5・10 デラトール神父を迎えて(総評会館)
5・17 ママ・デラトールを迎えて(渋谷コープ)
5・21 女大学「新しいフィリピンと日本の役割」女の立場から」池住 圭
5・25 「問い直そう援助を」市民集会」に参加
5・28 光州6周年集会
6・15 「中曽根のやることなすこと全て反対」集会
6・18 女大学「内的発展の担い手としてのおんな」鶴見和子
6・29 アジアリンクのクリスチーナさんを迎えて
7・16 女大学「私たちに何が出来るか」
8・15 「8・15反戦マラソン演説会」(戦争を許さない女たちの連絡会主催)に参加
9・14 '86夏合宿(伊東さつき会館)テーマ「私たちに何が出来るか」参加者43名
10・15 女大学「熱帯林の破壊と日本人の消費生活」松井やより

恒例 富山妙子さんの絵による

カードが今年もできました。

2折カード 10枚 2,000円/20枚 3,600円
30枚 5,400円/50枚 8,500円
はがきカード 30枚 2,100円/50枚 3,400円
100枚 6,500円(バラ売可)
★年賀状やクリスマスカードとしてもご使用になれます。



郵便振替は「富山妙子 絵の会」東京5-15796

注文・問い合わせは
今井真理まで ☎03(508)7144
またはハガキで中野区白鷺3の6の6へ

女大学暮らしの中のアジア II

—私たちの生活のあり方を問い直す—

- 87 1月21日(水) おんなの健康と家族計画
2月18日(水) 茶を摘む女たち
—紅茶の生産から消費まで—
3月18日(水) パーム油を知っていますか
—ラーメンから洗剤まで—
4月15日(水) 日本のコーヒーはなぜ高いか
5月20日(水) アジアの米と日本の米
—水牛からトラクターへ—
6月17日(水) ファッション戦略
—アジアの繊維工場の女たち—
7月15日(水) O A化とアジアの女子労働者

以上予定

機関誌「アジアと女性解放」

- 第1号 韓国民権闘争の女たち 300円★
第2号 買春観光を許すな! 300円★
第3号 日本企業は海外で何をしているか 300円★
第4号 アジアへの文化侵略 300円★
第5号 いま戦争責任を考える 300円★
第6号 アジアの闘う女たち 400円★
第7号 女と国籍 300円★
第8号 続・買春観光を許すな! 400円★
第9号 第三世界の女と私たち 400円★
第10号 光州一周年によせて 400円★
第11号 特集・暮らしの中のアジア 400円★
第12号 特集・戦争と私たちとアジア 400円★
第13号 特集・8.15とアジア 400円★
第14号 特集・侵略と性 400円★
第15号 特集・全斗煥の訪日を許さない 400円★
第16号 特集・アジアの女と人口政策 400円★
第17号 特集・アジアの女たちの詩 400円★

★印は残部がありません。送料は1部170円です。郵便振替か切手代用(60円切手)で申し込んで下さい。 郵便振替 東京0-46143

ASIAN WOMEN'S LIBERATION English Edition Now Available!

- ★ No.1 Asia and Women's Liberation
No.2 Japanese Economic Invasion
★ No.3 Prostitution Tourism
★ No.4 Asian Women in Struggle
★ No.5 Blown by The Winds of Asia
No.6 Sex Tourism and Military Occupation
No.7 Asian Women and Population Policy
Price: Inside Japan No.1-¥300
No.2, No.3-¥400
Address (for Order):
Asian Women's Association
Shibuya Coop Rm.211 14-10, Sakuragaoka,
Shibuya-ku, Tokyo 150 Japan

あなたも会員になりませんか?

★今号(No.18)は「開発と女性」を特集しました。先進国や都市のエリートや男の利益のための「開発」により、アジアの女たちの状況はさらに厳しくなっています。今こそ、私たちが女の視点で「開発」を問い直すことが必要なのです。現在私たちの会では「開発援助」「暮らしの中のアジア」「アジアからの出稼ぎ労働者」の3つのグループができ、活動をしています。共に学び、考え、行動する女たちの参加を歓迎します。

★私たちの会は'87年に会発足10年目をむかえ、秋には10周年記念イベントを企画しております。皆さまの参加と暖かいカンパをお願いします。

★会員の申し込みはハガキなどで下記まで
〒150 東京都渋谷区桜ヶ丘14-10 渋谷コープ211号

★お願い 会の運営費は会費と機関誌売上げから成り立っています。ぜひ、機関誌を一人10冊まとめて買い、友人、知人に売って下さい。
まだ年会費3500円を、振込んでない方は下記まで至急お振込み下さい。1口月1000円の維持会員もついています。

郵便振替 東京=0-46143

「アジアの女たちの会」

編集後記

女大学のお話をまとめる、といってもテープを起す、要約する、講師の方に原稿を戻すして直して頂くにはけっこう時間がかかってしまいました。たくさんの方が読んでほしいです。(M・T)
夏合宿までには——と思っていたのが、何ともう年の瀬。それでも「開発と女性」をテーマとして開いてきた「女大学」の内容をまとめることができてはっとしています。来年が世界中のすべての女たちにとってよい年でありまうように。(ゆ)
途中から編集に引っぱりこまれた上に初めてのことで、いろいろ勉強になりました。でも感想一言、やっぱ編集とは大変な作業です。自戒の意も込めて、皆さん原稿は早目に出しましょうね。(CH)

スライド

裏切られた夢

—アジアからの出稼ぎ女性—

製作: アジアの女たちの会
販売: スライド・テープ付

20,000円

(日本語版・英語版)

貸出し料: 5,000円(送料別)

上映時間: 21分

アジアからの出稼ぎ女性たちが、どのような状況で日本の性産業で働いているか。彼女たちはなぜ日本にやってくるのだろうか。スライドをみて一語に考え、彼女たちがそして私たちが性的搾取から解放される道をさがしていきましょう。集会などでご利用ください。

アジアの国々、なかでもこの問題にかかわって働いているグループには、英語版のスライドを安価でわけたく思うので、カンパ大歓迎です。

連絡先: アジアの女たちの会

'87年3月までの担当: 松本 美枝 ☎0427-96-1639

'87年4月からの担当: 遠野はるひ ☎045-592-4950